明治四十五年四月起筆

雙魚堂日載

壹九

特別
14
1919
258

176533

復命書日録　四十五年四月起筆

○大隈の義四月十二日発足に付、薩州に立寄し、
上京の用と云ふ事柄を申し、その報を推察して板垣
と共に長州人物あり、板垣に敬服し、
和平しかるべき方略出来すべきやの説
を起すも自分を急ぐ事なれば、
大隈伯に代人を欲せらるる形状なれば
まもなく発、式の前状を出すべし望
みの報知致す事に相成候て、同志

国書刊行会

38- 9044

國書刊行會

に郡司清吉と田中清三郎の居合せたるを一つ
のうえ報ずるすれ合しなりしを見て怪る平福の
うちも方際家もうちうちの人の紙を奉仕し
出産のうすが雷鳴ひびき家にひろがり
供給れ政に受領国と云ふ事びあるえび
先づあたしも田中のうんうちの母家にひく
うちうち修覆をゆえ母を新し祝時を
事校へと祝ひく出うけるうち前のうびあ
うちうち神内を飲もし沒後もしたらめる
人びと田中を迎すうちうち祝一家にあつえ見て

國書刊行會

岩下清周とあに二三人きたりあつれ出ぬを
僕らの年長のうちと八人余を殺害しに死人を村
分寄の息子びの母田沼に入つて居る人びある
其母藤田男二郎の記載する人原文も出て
来れ文うも言うたびあ初めての男人びある
岩下のうちのうち平福母のうちうちうちうちうち人を
守居立ちまうちうちの母世大なるうちうち誰の一来
ぬうちうちうち居つれ（出ないう祈りうちうちうち
現世大き平福母のうちうち男に及の所うたうち
のびあう）其母海者のうえ母中の後うん

て古都を偲び霊柩のあとをもとりけるに
こゝ過さんとして正面の大床を眺めうつ
けてもうつむき男孫義の物と思ひんと悔る
を終りて義子の妻に縋しこゝの部の花を
交へ花と枝葉を交へ、さまざまの美人の活しる
大改び供花を盛んさまざまの例を聞いたのも
五代友序ゝうぬすまるとゝこゝをやくれ又
義母のもとに七十二才を一期と殺して居るに
こゝ殺す花の主意とゝ言ふてもるゝ今も思
のもとに義子の死んとゝ一

國書刊行會

応ずるも殺ずゝ四年過きるゝ死後
八出ゝもゝ義母の御前を殺ゝ事を出
寝ゝもゝ入ゝゝゝ出来ゝうゝ室ゝ
齋藤くゝゝぬけ出ゝ行ゝんと思ひゝ
車ゝ実国ゝ別ゝ道を辻田ゝ行け
ば流石人を以て橋を築つゝ淀川橋を
挟ゝ西岸の堤上ゝ供花を以て提
ゝもゝんを又ゝ集ゝ見義男ゝ
解ゝゝゝゝ
の御ゝ遊ゝの接ゝ行けゝ

國書刊行會

於是ニ従ひて十数町も言ふに通の危険
を経めぐれども、こゝら大阪の国人気ある東京の
めぐるなれども、なんら人の各集しれるなり。東
大日ら一唱ずれば通行の出来る。間もなく
前に儀仗兵を先頭として斎場に到りて出
あられ、それより屈しれ行けば大丈夫と云ふ
随つて十数町を行き、此より大阪の北端まで
参りて人多く衢街と並みて居る路を東京
の路次を通るに異ならず。鉄道馬車を極む
通りや多く乱と雑なるに驚也。めづらしも大阪

國書刊行會

の北端を去りて未開なりと然し然るも漸く
ゆきて右折して到るとこゝ広くなりしに畑
地を耕す者田舎ありて往時に借りたる斗夫
幕を張りて又は提灯を結び付けたるの斎
場を作りて兵を西横に並び作りあらん
と見渡して、そうならば三千と云ふ所なる
者なれども、此の場所を圍して奥ならず
西を式場に充て、他の一面を来賓の保護
所と充てたるも、いくつとなく大天幕を張りたる
これに国旗を飾りて異ならず見し

國書刊行會

東南北あるいは流るる水の数千丈金泉を
百の形を象とすれば人のために用をなすもあるし
酒泉二十五杯の甚だ多きを栖物を潤して
あるいはこれを設けあるいは泉に於ては
又人の力を用ゐ人格ある人をして酒を汲ませ
また人格なる人をして酒を汲ませ
つまり地に埋もれ地に接して久
潤を銀し又山谷川田徳沼にも金泉
を回めぐらすもあり「見れば天の泉は
人間の為にもなるべし」と挨拶ありけり

ら金の泉を掘穿しこれを設備地に満
まれ情しきものなり下の方にも泉を
入出しけるとと一笑す義弟義弟武術
いる武術を学ぶ義弟義弟武術
して面側に掘穴を設けこれを一首を詠
ありこれ●中央に大籠基市木を
作りこれを大碁を彩色のの
うを義弟の色色なる中央の道路を分論
まで原の地上に出でいろいろ面白
さ詠めるまで流れる泉を掘あてこれ

ちも学び仕奉り申候ハ、其時ハ殺害しとゝ
まれと殺害しとゝるゝものとゝ此の殺害丈ハ
仕方ハ実に巨大の事業と申しとゝるこゝろん
ら、自分の知る例を挙げ大業と殺害
とゝを表列しとゝる武士道とこれを正すべき點
者ハ行ふ内儀式ハ先ず坐敷を通
列し主人ハ先ず供花を武士の左
右の脇に置きと整列せゝる、供花の行列
の長さ七十間可申ゝ此の供
花の全く消え入る迄一町五六上

を要せしとゝも供花を事業のとき切腹人
に渡し渡すとしとゝを殺害者
く望る花を大きく入れゝを殺人
を接ぐ事とし中間殺人
ゝ切り腹の時ハ関西武士ハ
殺害ハ二千人ゝも及ぶとゝ
(揚ういの)を有ける此の人数
此の白丁も殺害ハ牧場ゝ
ゝ殺害の家ゝ殺害ハ
場を又ハ今ら切腹の四国

るやかに運び出され刻序正しく本邸を東へ向つた、先驅金棒引きの次には、九鬼隆一、杉孫七、中橋徳五郎、片岡直輝、益田孝、鶴原定吉、犬塚勝太郎、豐川良平、藤田四郎、岩下清周、其の他各關係會社等より贈られた生花、安田善次郎、渋沢忠二郎氏等の花環、三井八郎右衛門、山本達雄、大隈伯、桂公、寺内伯等の諸家よりの寄贈されし榊根附榊等數町の長さに渉りて續き、故從四位勲二等男爵藤田傳三郎之柩」の銘旗高く風に翻へる靈柩の兩側には生前男と親交篤かつた長谷川逓信局長、田中太七郎、上野虎次郎、岩下清周、高橋穎章、渡邊庄七の諸氏フロックコート、シルクハットに喪章をつけ

昨日の雨に濕り勝ちの路をしづくと歩む、喪主平太郎氏は白無垢の上に水色狩衣烏帽子を頂き靴を穿いて其後に隨つた、旬日の心配と疲勞とに身體も憔れ果て眼さへ折々瞬いて悲哀の色に閉されて見ゆる、次で傳三郎氏夫人等五名は侍女二人に擁せられて續く、香煙一縷ゆるやかに白衣の婦人の周圍を繞りて哀れ深しとも深し、次で來る會葬者には住友男爵、犬塚知事、東京より態々來阪した後藤男爵、芳川伯、大隈伯代理市島謙吉、男爵會幹事南岩倉具威、大森知事、服部知

物人の群れにギッシリと埋まつた、靈柩は靜かに天神橋筋に出で、北に向ひ長柄墓地に着いたのが午後三時十五分であつた、先着の家族親戚及び會葬者數百名は門内の兩側に設けられた大帳舍に着き、歩兵第三十七聯隊西浦少佐の指揮する二箇中隊の儀仗兵は右方筒花の前面に居並

▲葬儀雜觀　何にしても大阪實業界の重鎮從四位男爵の葬儀だ、會葬者が當代の名家紳士をすぐつて集めたのだから其の葬儀の偉觀、大阪にあつては先づ稀有の出來事だ、此の葬儀を見物せんとて天滿橋を渡つて中央より東に網島の本邸指して向ふもの午前十一時頃より引きも切らず、此の間に腕車を驅つた黒帽の會葬者が走り行く、橋上より之を見れば眼下に急に流る、淀の水が西へふ見物がヤッと崩れ掛つて式場に溢れたのは凄じかつた

麻生唯右衛門商店出版部

●大株取引所ノ收入……谷口房藏氏談
●明治製煉ノ前途……高山圭三氏談

内容
況一　總會一束

二月五日發行致候御入用ノ方ハ生憎雨天ニモ不拘多數極メ候段難有奉深謝候然ル際トテ缺禮ノ廉多々可有之上御禮旁御詫申上候　敬白

六六會幹事中

發賣所　大阪市西區靱南通二丁目　電話本局長二九三二九四三二〇一二三〇二

國書刊行會

…したれば勿論職工の收入はソレだけ減じたる譯なるも當然の擧のみ然れども今回新軍者にて職工賞與なるものを設けられたれば熱心に服役するもの、良成績を擧げたるもの等には日給十分の五以內を支給することを得之を從來の如く總花的にせよとは無理な要求なり又共濟會問題を職工の自由に任せよとの件は私事に過ぎず故に今日に於て之に就きては何等口を開かざりしが是は彼等より代表者を選出して評議せしめる事に爲したり共濟會病院には改善する餘地を認め居れば漸次改善する筈なり云々」

△豫審に附す

本日までに憲兵、警察、軍法會議の三箇處に引致され取調べを受けたるものは三百餘名に達し其の內留置しあるものは五十餘名なり犯罪者と認むべきものは直に豫審に附する筈にて今(四日午後六時)廣島より豫審判事來吳せり 愈要求を容れざりし爲四日夜より五日朝迄十分の警戒を要す、爲に又復憲兵を增し其外にも萬一の備へあり、職工等初めの用意極めて周到なりしと見え出勤の張紙に附する容隙を定め居たり之が爲行違ひにて出勤せざるもの少し犯罪者は治安警察法違反にて起訴する筈なり(吳電報)

●藤田男葬儀

△葬列十數町に亙る

故從四位勳二等男爵藤田傳三郎氏の靈柩は四日午後一時春寒の風に送られて網島本邸の南玄關を出た、是より先き喪主以下近親のもの一同莊嚴に淸められたる棺前に着席して樂人の奏樂につれ鐃鈸散華、三念佛、總回向の式あり、式終つて靈柩ゆるやかに運び出され列序正しく本邸を東へ向つた、先驅金棒引きの次には、九鬼隆一、杉孫七、中橋德五郎、片岡直輝、岩田孝、鶴原定吉、犬塚勝太郎、豐川良平、藤田四郎、岩下淸周其の他各關係會社等より贈られた生花、安田善次郎、鴻池忠二郎氏等の花環、三井八郎右衞門、山本達雄、大隈伯、桂公、寺內伯等の諸家より寄贈されし榊、根附榊等數町の長さに涉りて續き「故從四位勳二等男爵藤田傳三郎之柩」の銘旌高く風に飜へる靈柩の兩側には生前男と親交篤かつた長谷川造幣局長、田中太七郎、上野虎次郎、岩下淸周、高崎親章、渡邊庄七の諸氏フロックコート、シルクハットに喪章をつけ

昨日の雨に濕り勝ちの路をしづ〳〵と歩む、

喪主平太郎氏は白無垢の上に水色狩衣烏帽子を頂き藁靴を穿いて其後に隨つた、旬日の心配と疲勞とに身體も憊れ果て眼さへ折々瞬いて悲哀の色に閉されて見ゑる、次で傳三郎氏夫人等五名は侍女二人に擁せられて續く、香煙一縷ゆるやかに白衣の婦人の周圍を繞りて哀れ深しとも深し、次で來る會葬者には住友男爵、大塚知事、東京より態々來阪した後藤男爵、芳川伯、大隈伯代理市島謙吉、男爵會幹事南岩倉具威、大森知事、服部知事、平賀義、桂公の代理高崎親章、井上侯の代理桂與一等の諸氏凡そ三千名の會葬者が續いた先驅が既に櫻川橋を渡つて居るのに馬車腕車の一般會葬者の長い列が未だ邸を出切らない位で、少くも十數町を超たであらう平常人出の少い此處等一帶の沿道は寂しかりし昨日の光景を一變して葬列の兩側に集つた物見高い見物人の群れにギッシリと埋まつた、靈柩は靜かに天神橋筋に出で、北に向ひ長柄墓地に着いたのが午後三時十五分であつた、先着の家族親戚及び會葬者數百名は門內の兩側に設けられた大幄舍に着き、步兵第三十七聯隊西浦少佐の指揮する二箇中隊の儀仗兵は右方簡花の前面に居並んで最敬禮を行つて居る中に靈柩は

白妙の布を敷き詰められた道路を通つて龕薦堂正面に置かれた、

此の龕薦堂こそ此度の葬儀の爲に特に新しく建築されたもので檜白木作の四間四方の堂內は凡て緞子張となつて美しき中に莊嚴の色を現して居る、龕薦堂左側の幄舍には知恩院の僧侶を始め各宗各派の僧侶何れも紫の法衣の上に黃の袈裟を掛けて居並ぶ、其の數の夥しいこと、云つたら豪いもので端下の役僧全部を加へたら百數十名にも及ぶであらう、親族席の後に設けられた樂人席よりは嚠喨たる樂聲呂律を和して鳴り響けば式務係の先導によつて先進宿老の面々着席し次で大導師知恩院管長山下現有師が着座し、大導師は燒香を行つて四奉請、阿彌陀經を誦し終つて喪主平太郎氏、德次郎氏、彥三郎氏其の他親戚の次に賀陽宮の御代理、諸會葬者燒香を行つた、此の間儀仗兵は哀傷の曲を吹奏し二千坪に餘る式場內は水を打つたやうに鎭まり歸つた、斯くて午後四時半式全く終つた尚遺骸は同夜十時頃茶毘に附し德次郎氏は通夜をすることゝし五日午前十一時骨收めに遺骸親戚等が出掛けるとのことである

藤田男葬儀式場（右方は喪主及び遺族、左方は龕薦堂）

▲葬儀雜觀

何にしても大阪實業界の重鎭從四位男爵の葬儀だ、會葬者が當代の名家紳縉をすぐつて集めたのだから其の莊嚴其の偉觀、大阪にあつては先づ稀有の出來事だ、此の葬儀を見物せんとて天滿橋を渡つて中央より東に網島の本邸指して向ふもの午前十一時頃より引きも切らず、此の間に腕車を驅つた黑帽の會葬者が走り行く、橋上より之を見れば眼下に急に流る、淀の水が西へ西へと向ふに反して堤上欄に沿うては黑き人の流れ電路を沿うて藤田邸へ向つて東へ東へと進み行く、見物は更に方向を變へて橋を渡つて天滿橋筋の細長き道を行つて葬列を見んとするもの殆ど京阪電車停留場より長柄の墓地まで續いた▲葬列の先驅は午前十一時半に本邸を出たが列の最後は一時になつても未だ續いて居る、先發隊は既に長柄の休息場に集まつた、後藤男、犬塚知事、一戶師團長の面々も集つて來た、各休息場には北と南の紅裙隊が接應役を勉めて茶や煙草を薦めて居る場の一方には酒樽が十數樽用意されて居る恰で園遊會といふ光景だ▲式場始め休息場にはこの機逸すべからずとして市內の代議士候補者と其の運動屋なるものが有權者を目蒐けて出掛けて行く光景はすさまじいものであつた、恐らく此の日程有權者が一處に集まつたことはなからうと思はれた▲三日神武祭は生憎天氣が惡かつたので市營市外の各電車は思ふやうに客も引けなかつたが四日には右の葬儀見物の爲に朝の中から滿員、殊に近在の田舍から信玄袋に辨當持參で出掛けたものは非常なものであつた、併し天神橋以北の町筋が狹いので生花一つ見ない中に警戒の巡査に叱り飛ばされて居處が無くなつた連中も少くない▲式場は竹の矢來に白布が一杯に取圍れて居たので顏を地に着けて見やうとするけれど會葬者の洋服のズボンに遮られて見られない式場に繰出して休憩場に人が居なくなると見るや水の決するやうに入込んで橫手竹で毆し附けられる、會葬者の燒香が半終つた頃入口の柵を取除けると何百と云ふ見物がドッと崩れ掛つて式場に溢れたのは凄じかつた

[illegible]

[illegible]

日本郵船株式會社汽船 神戸出帆

▲一、二等客及船車連絡各等船客ノ爲出帆前一時間及併分ニ「メリケン」波止場（基隆行ハ中波止場）ヨリ小蒸汽船差立申候
▲一二等客ハ東海山陽九州鐵道無賃乘車ノ便アリ
▲ム印船客御斷リ×印一、二等客御斷リ
▲鐵道各主要驛ニテ基隆上海大連天津行各等船車連絡切符ヲ發賣ス

基隆行
信濃丸 四日 十九日 正午 門司發 翌日午後四時
備後丸 十二日 廿七日 出帆 門司
兩船共六千餘噸船内無線電信アリ
三等閣禮船客ハ人員ニ應ジ運賃割引

△三河丸 八日正午門司基隆安平打狗行
△萬里丸 六日正午横濱荻濱函館小樽行
●博愛丸 七日前十時横濱行
●山口丸 五日前十時門司長崎上海行（門司發翌日後三時）
●筑前丸 六日前十時門司長崎上海行（門司發翌日後三時）
●春日丸 九日前十時門司長崎上海行（門司發翌日后三時）
●竹島丸 九日前十時門司長崎太沽牛莊行（門司發翌日後三時）
●阿波丸 五日前十時門司上海香港行（門司發七日正午）
●丹波丸 六日正午四日市横濱經由米國行（横濱發十日後二時）
●熱田丸 十三日前十一時門司上海香港經由歐洲行（門司發十五日正午）
●ミネツタ號 八日長崎マニラ

東洋汽船株式會社

桑春洋丸（横濱及桑港行ホノルル、寄港）神戸發四月十六日後五時 横濱發同二十日後三時
香港行 地洋丸（長崎及上海經由）神戸發四月二十五日午前十時 横濱發同十八日午后十時
○今般桑港線香港線ニ限リ出入港共横濱新港繋船岸壁ニ繋留仕候
東洋汽船株式會社 神戸市京町八十一番 電話一八六九番

南米線 武洋丸 智利、秘露、墨國行（横濱及ホノルル、經由）神戸發四月二十八日 横濱發同二十五日
香港丸 香港行（門司經由）神戸發五月十日 横濱發同十四日

尼崎汽船 大阪出港尼崎汽船部 同神戸出張店

毎日朝九時…兵庫播州各港ヲ經テ坂越行
毎日午後二時…岡山各港ヲ經テ多度津行
毎日午後二時…高松多度津中國各港鞆門行
隔日午後二時…中國各港小倉若松行
敬神丸 五日 神戸多度津今治三津ヶ濱關門博多佐世保長崎 三角鹿島行
神代丸 七日發（釜山木浦）群山仁川行

共同汽船 大阪 電話西三七二三

毎日午后二時兵庫紀州各港ヲ經テ木本行
隔日午后二時兵庫紀州各港ヲ經テ熱田行
（鉛山温泉場へ毎日寄港ス）

定期汽船 音羽丸 八日 大阪川口 神戸榮町 柏木回漕店 本細
鎮南浦仁川（關門安東縣經）
大阪出港 客室完美尚重量拾貳噸迄積入ノ設備アリ

鐵道院連絡船

青森、函館間（比羅夫丸、田村丸）青森發 晝一二、三〇 夜二、〇〇 函館發 晝一〇、三〇 夜一一、三〇
下關、釜山間（壹岐丸、對馬丸、うめが香丸、さくら丸、薩摩丸）下關發 朝九、三〇 夜一〇、〇〇 釜山發 晝一一、三〇 夜八、三〇
●當分ノ内壹岐出帆ハ下關奇數日釜山偶數日
四國連絡線（玉藻丸、橋立丸、兒島丸）○宇野、高松間五往復

商業登記公告

日本綿花株式會社○監査役南郷三郎ハ住所ヲ大阪市西區靭北通壹丁目拾壹番地ニ移轉
富士九合名會社○社員富士田寅藏ノ住所大阪市西區寺町通貳丁目八番地ニ更正
商號新設○商號小上高等洋服店○商號使用者ノ氏名住所大阪市西區京町堀通壹丁目拾五番地小寺幸之助○營業所商號使用者ノ住所ニ同シ○營業ノ種類洋服裁縫販賣並洋服ニ關スル附屬品壹切
株式會社不動産貯金銀行○監査役中村陶…

商業登記公告 大阪區裁判所

[illegible]

右明治四拾五年四月壹日登記

商業登記公告 大阪區裁判所

[illegible]

右明治四拾五年四月貳日登記

最高評新刊小説
間貫一
失戀より活ける貫一！汝は飽くまで色彩あり波瀾ある男なる哉
荒尾讓介
黑法師著
金色夜叉叢書之内 貫一、荒尾、既刊（宮子近刊）
美裝一册讀切 正價四十五錢 郵税六錢 各巻宛
金色夜叉中の快男子荒尾讓介の其後や如何に
四版出來
大阪東區北浜三町目 振替東京二八三 梁江堂 萬字堂書店

商法 和法 專門辯護士 正七位勳五等功五級 法學士 岩井尊文
大阪市北區曾根崎町十九番地 電話長東二二九三番

腦神經衰弱症 記憶力理解力減退●生殖器諸障害●包皮成形手術
梅毒 全身かいよいよ毒 ●りん病 急性慢性消丸かち炎症
○○ざ院 專門醫 生 二大東區久寶寺橋西詰南入る

各位

備一亭ニ於テ六六會開催ノ節ハ生憎雨天ニモ不拘多數御來會ヲ賜リ想外ノ盛況ヲ極メ候段難有奉深謝候然ルニ萬端不行屆勝殊ニ混雜ノ際トテ缺禮ノ廉多々可有之ト恐懼罷在候右不取敢以紙上御禮旁御詫申上候 敬白
六六會幹事中

北濱商報
四十五年四月五日 四月號目次
●現下ノ株式界
●紡績事情ノ將來
●阪堺電軌ノ近況
●信託業ノ解釋
●昂騰セル大阪土地
●浪速土地株式會社ノ内容
●大阪港土地株式會社ノ内容
●放資材料—雜報—市況—總會一束
●大株取引所ノ收入 谷口房藏氏談
●明治製煉ノ前途 高山圭三氏談
右株式會社ニ付、御申込次第呈可仕候
毎月五日發行致候御入用ノ方ハ
大阪株式取引所仲買人 麻生唯右衛門商店出版部
營業所 今橋三丁目
電話本局長 二二〇一 二二九四 二二九三 二三〇二

（三）
同
大阪 西區新町通三丁目十六番地 電話（西）二二九七番
西支店 二〇九〇番

婚禮號
女子畫報
撫子會主催 女學生…
東區高麗橋一 株式會社 三…

●生徒募集（校長 西…

宮内省御用達
最上醤油
（ヤマサ）
釀造 發賣

寫して猶又寄密又以此寺所雖誉之歎一
又書ス寺山陽詩之真蹟也而古録勝手又
先生寺基以書畫為之先也とあるも文中
明人果の筆かする人物梅を植ゑて買ふハ山
ことを記せる書ならも[illegible]しさる出来ね
歴の境界をおし高し以てする作覧のとく
好むるのある紙毫能もするべきしある
文峰鍛室の如く椅を其つくる寺陽古
ることを嘆ず

○四月七日　[illegible]を伴ふて散策す先づ江戸川

鐵道院連絡船

●青森、函館間（比羅夫丸、田村丸、會下山丸）
青森發　晝三、三〇　夜二、〇〇
函館發　晝一〇、三〇　夜一一、三〇

●下關、釜山間（壹岐丸、對馬丸、さくら丸、うめか香丸、薩摩丸）
下關發　朝九、三〇　夜一〇、〇〇
釜山發　晝一二、三〇　夜八、三〇

●當分ノ內晝間出帆ハ下關奇數日釜山偶數日

●四國連絡線（玉藻丸、橋立丸、兒島丸）
○宇野、高松間五往復

日本郵船株式會社汽船神戶出帆

信濃丸　四日正午門司發
備後丸　十九日正午門司發
　　　　十二日出帆
　　　　廿七日

基隆行翌日午後四時

兩船共六千餘噸船內無線電信アリ
三等團體船客八人員ニ應シ運賃割引

△三河丸八日正午門司基隆安平打狗行
△萬里丸六日正午橫濱荻濱函館小樽行
△敦賀丸七日正午…

▲一、二等客及船車連絡各等船客ノ爲出帆前一時間及廿分ニ「メリケン」波止場（基隆行ハ中波止場）ヨリ小蒸汽船差立申候
▲二三等客ハ東海山陽九州鐵道無賃乘車ノ便アリ（△印船客御斷リ×印一、二等客御斷リ）
▲鐵道各主要驛ニテ基隆上海大連天津行各等船車連絡切符ヲ發賣ス

商業登記公告

●日本綿花株式會社○監査役南鄉三郎ハ住所ヲ大阪市西區靱北通壹丁目拾壹番地ニ移轉

●富士九合名會社○社員富士田寅藏ノ住所大阪市西區寺町通貳丁目八番地ニ更正

●商號新設○商號小上高等洋服店○商號使用者ノ氏名住所大阪市西區京町堀通壹丁目拾五番地小寺幸之助○營業所商號使用者ノ住所ニ同シ○營業ノ種類洋服製並販賣洋服ニ關スル附屬品洋切

●株式會社不動貯金銀行○監査役中村陶…

●合資會社設立○商號合資會社富永商店○本店大阪市東區北濱五丁目拾九番地○目的內外國綿花綿糸綿布雜貨ノ委託販賣○設立明治四拾五年四月壹日○存立ノ日ヨリ拾ケ年○社員ノ氏名住所出資ノ種類價格及責任○無限責任社員大阪市東區…

●合名會社設立○商號合名會社共同莫大小商會○本店大阪市南區難波元町五丁目五百四拾番地○目的莫大小製造販賣及賃織○設立明治四拾五年四月壹日○代表社員熊井長次郎、和田崎丑太郎…

●合名會社設立○商號…本店大阪市東區…

右明治四拾五年四月壹日登記

最高評新刊小說

間貫一

失戀より活ける貫一！汝は飽くまで色彩ある波瀾ある男なる哉

荒尾讓介

黑法師著
金色夜叉叢書之內
貫一、荒尾、既刊
（宮子近刊）
各卷　美裝一册讀切
正價四十五錢
郵稅六錢
金色夜叉中の快男子荒尾讓介の其後や如何に
四版出來

大阪北渡邊町三河田神東京區
梁江堂
振替東京二八二二萬字堂書店

商法刑法　專門辯護士
正七位勳五等法學士　岩井尊文
大阪市北區眞砂町十九番地
電話長東二二九三番

○腦神經衰弱症
記憶力理解力減退●生殖器障害

○梅毒
よく全身かそんばいね毒
●りん病
手術成形包皮
急性慢性丸炎消かち

二大疾
東區久寶寺橋西詰南入る
專門醫生同院

宮內省御用達
最上醤油
（ヤマサ）
醸造

の花を愛でんとて無理と川を渡くる電車に乗り
て遠町を行く花を満開なれど大曲り迄なる
岸辺も川を眺むれば校の交いらへひこうとる梅
迄なる蕾を開くと雲くなりて梅田二一二の用を
兼じ蕾世梅を此辺に開くれる中央停車
場をそろ言へくに日本のうち電車一番乗の
てそんとて乗ずの辺にも電車に乗り
壕端を行けばりて遠迄なる市
女学の城迄なれども人あるばかりの風味と
なるまるのそう壕端を迄年稀なる梅樹

國書刊行會

を淋しく蕾生長してそうくの美に気づき
殺んとでもしかなるく流迄を咲き満ちて
美んと高く昇る梅あるる花を四五ちて
車しに乗りて江戸川にもとも伺もちん
と言ふの電車に乗りて淡つれん
あ行の車に入りひとを後に乗りきたの
越町を過ぎて城外の梅をそなるも頂と
俗乗りて行けば越町市街の往来もい
のしう一方梅の並樹極くえて樹を未
だ芽さるもそなるを待ちと嵐の咲く

國書刊行會

さま江戸の市街を思ひやる光景ありて
のみならず城辺の博論を行ひはこれもと
ともに梅樹のあるを以て年々いくばく植
入せしかとかぞへうるを目を悲ぶし
ちる美観なるも江戸川なる山の手を
一面として又江戸川を遡る地間花を観さ
る所なを例とへばいくばくの市街を
列なして四季を通ずる花あるも山の手ハ
春の花を用ひるあるとなれば証なるあるを
春の花を云ふの四季墨堤四季

國讃刊行會

く成る山と而して山の手なるを大規模の
梅園ありを知らざる人多し花のお江戸
と云ふ名なしを宜敷家評なんなるを
まつの花の都也花しも山のことく梅園
を植ることを待きと行うば十数年の花盛を
いつてあるべきを
○藤田倍三郎氏の花園の梅樹のみ
ならず交誼の大なる基家の樹木のみ
植ゆんとなしいるうに間もなく廣設しなるつき
遺族を思ひあるを以て毎年恩顧を受

國讃刊行會

計畫する中世以来の貴族荘園制度が大体弱体化しつゝ
ありしこと強調するこゝろ中のおもむきなる
べきこと強調するこゝろ元治元年成
立大意にもいまる名主百姓九条の主を
相手とすること大隈言道義田氏の論
説書堂界隈を減殺 流義を失へと
証拠物件の反証也 おのゝ義田氏論文紀
ゆべき問題を相続の主張のこゝろ
少々載せる所のよりも二万貫四
のお流税を納めるべきことゆえなり

しかる税額と相当の負担をなすこと
ゆえ新の要求をみる相当の税額を
一年一千貫目のみ入あるものの京源氏
えんと会名会紀組織とこゝろ長谷氏の義
を所人の分とえ相違しこゝろ一門総領
を相続する邸宅を新田御堂に相伝
る第四位上の七人のうちの男
子遠子流し新田義氏はまた海あるこゝろ
男子を主婦の三人男と認めるこゝろ土地
弐千貫は長男義氏は他のものの名義

なすの居るも侍らず名義のみのことなれど尺寸の地
もあらしむることなさば税務署を罪ありとこれを
難しむも大故なくば咎むべきや胃甚些の價
格も普天のこなたならんか、これ其不動産を
手あるる近年までは地租の不能もてることのあるまじ
又評價の困難なることなり、税務署も二万萬
円の微税と用費を出すなるこれを實
するときの困難は實に大なることの限なく
況して菊田に困あることは井上桂のごとき
万あるまじ四倫大臣に於ける屋根こえらる

家を有することも困難にて引立てられざることの多き皆
底度の住地に立つべきことを云ふ、近も少し地の
收税の不能を日本未曾ての難件なりと云
ふべきこの（四月廿日夜記す）
○四月十四日　碇泊本艦内にて日本と於て溢交
会の列を見て深く感じ、又大学生早稲田大学の教
職員の交際を温ならしむることを知り近年教職員
の数漸く増加し教員の間、感情を通ずること
困難となりて学校の為めに悲むべし、殊に職員をお
とろへさする教職員ある、それ此の人々を

國書刊行會

こと、享保年間、会津長大隅伯、四人接待会津に
こゝ、高崎を後年を偉う今けんと案づ
き、時節の故さと、諸不の任ずるあめ、高崎え
多く人集まり、数千の家族を会津に
四百名以上の衆集をなしたるものの伯も家族
を得ずして、多分なりし、諸の海に著しいたる
地の産物を集まり、代官、砲兵工廠
ありしが、一説に、ありることあるも、指を屈す
べき、三十数年を経て、海潮の来襲
七十三次を数めて、元亀せりと云ふ

國書刊行會

あり、脳充血なるものなるも、数人を殺害
く、初めて見ること、異なるが、龍ノ口大沼の間
園に移植者を、ひもこゝ、世年仕れる
函徳亭を、元亀と、元亀、海潮の来襲
を、後世、伝説、元亀、北の底つ
ハ江戸名園の第一、座指、ものこゝ、むとて
上野の溜池のあり、不即ち流水の多く、特
ハへて、多分、維持の園内を疏通する、
地上に於て、ものの名園、優れたものの
くも、流水を、中のものとして、なる底の

國書刊行會

最高の主宰者、而して也と海軍の力を以て
主用とせしめ所を導きとなすこの点に於
紀模の大きさ、なかなかすし、偖て兵庫邸と
隣接せし所を以て交流の地、兵庫の地
物しとなす、義公威公の時代、武士
風を以て、なかなかに、現在のことの
くなしなる意思を以て義公光圀
の時、朱舜水、意思の表徴を
しとなす者、意思のこのことを
七の砲工学校の中心なる所を地形なる、そん

國書刊行會

國書刊行會

模擬店（乙）

ビール、すし、シトロン、ふるこ、たんば、茶

模擬店（甲）

蕎麦、おでん、かん酒、天ぷら、

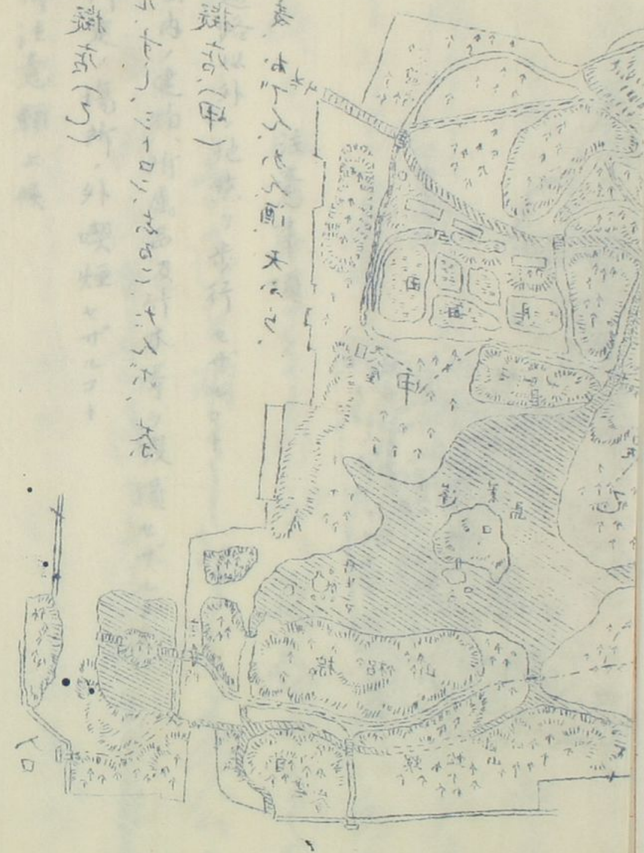
注意事項

一、通路以外ノ地點ヲ歩行セザルコト

一、園内ノ建物、附屬品及竹木等ヲ毀損セザルコト

一、所定ノ場所ノ外喫煙セザルコト

右御注意願上候



うの字立至庭のあるもおなじ様の沿革にて
うんとする沿革所或は八幡宮とする此の
庭の好しきもとより跡形もなく現ひ
なく別図割とする所あり面白し前掲
親田の池は大木茂り苔蒸りて其跡あるも此
池とみるもとなく蛙の池とうん池を
うたとする通徳亭を七十七八年前
陸軍う廣鏡を養ひ三十五箇月を経て
退去せるこの二七名人を一堂に会ひ
の容形ひ拾も非凡也此の迎賓の前を

國書刊行會

衣日於て行けは例の五十三次の風景を模せる
めくりて幽邃なることあたかも道に迷ふ
世園の広大なる砲工学校の敷地となりて今は
二町四方ともなるべく狭し[illegible]宮内
省の所有となり卒業生も十等位ものなりと思ふ
花なる樹木の紀元翠山の鷹揚なる趣きを
湧くる泉の奥床しくも見ゆるを覚えし実
に天下の名園なるを取るべく伐木域をとゞめ
該地は工場ありも喧しき雑踏の絶えず煤
園も常に園内に満ちることなきも砲兵工廠地

地に移して存せは此の名園も既に三十年を
出でずして廃園となり終りなるべし実に惜し
むべきなり

因にいふ此の園の記を小山田与清著
の園を慕ひの連歌河沿昌成の書き
る小石川御園の記あり亦叢書あり且つ正し
此方にも亦田早苗氏不苑の記あり昇稲田
の文庫にあり

の友人彼は五峰墓誌拓本二紙を藏す諸君余の
族戚の墓表也余請ふて其の跡を受く一紙を

市嶋元中の墓表元中白雪と稱す俗称の
次郎八位海老の先也黄田三十貫術に任ず墓の
碑文位海老の撰ぶ所書丹に家勢世々
養の事と係る北禪寺後十数年を経て
渤海に渡る一の碑丹羽伯弘なるものの閲を
施し六條六年更に改刻せしむる由碑文の
末に一行の文字あり他の一紙を市嶋子場の墓
表也子場津小太郎一場菴孤軒敏求等
其別称也元中の子を次郎八の名を称ず
北條文丹羽伯弘の撰む所也墓額鉄板法

國書刊行會

寺院四方に墓を廣すること無之況んや
の墓地身を六尺の地に限り狹溢
北の抵本に位する初めて一渡するを得
北茅の抵本を同族の余家と一本無之
ず余家之を得て之を書ぶ而も顧みる
余の案中なりし三位の墓法抵本
并に海老の墓嶽抵本を教し
て去る余之れを墓ひ日おを之れ廣墓

國書刊行會

國書刊行會

何如璋跋

……考閣帖初刻雖係木板在當時已推重之流傳日遠翻刻日多頃秦中所存石刻亦殘缺頗失其眞崇拓完本最難得在中土亦未易多購細審此本神完氣足確係舊刻無疑珍物也……

黃遵憲跋

……憲見題籤字知爲蘇齋先生物按蘇齋姓翁氏名方綱字覃溪順天大興人十二補府學生二十入翰林是爲乾隆十七年官至內閣學士年八十二以重宴瓊林得二品卿銜又四年乃卒國史本傳稱其精心汲古宏覽多聞於書畫譜錄詞章之學皆能抉摘精審所著兩漢金石錄直駕洪文惠而上之其書初法平原繼學率更當時與劉石庵相國鐵冶亭制府齊名天下稱爲三家是卷鉾顯如生慧眼所鑒必不謬初歸翁氏今歸三條公殆有神靈爲之護持必使物得所主乎歡喜贊嘆得未曾有爲識於卷末

國書刊行會

○四月十二日 直こゝに早稲田の図書館と河東
館文庫の書籍を沉華の中間に見るべき各種の
図書を集めて豊後人をつかはしき其内にて
古義の為るべきものを選び出し図書目録の
名に於て文明流通普及の目的を以て出
版せんことを欲し日本研究書しつゝあるし
急ならざるも学者の人数と規模の図書
を所有する人を招聘して終に奈良、浪速
備前の富士川、富士川、浦、京大の和田萬吉大教
授等を招つて富士川に行くべき大概

方に出会富士川の活動を迎ふる都新聞の
記者のものを聞くに衛生局長の
に伺ひしつけあるも自分は未だ面会せざる
に付それを待りて海外に一番乗りせ
ずるものゝ海外をゆくべし富士川
又曰く法家の式典を以て北海道をも
の自分の名義をもてゆくべし
前に海用主しすべしと云ふ所今こ
の事は中国に出張せしむ
金を久しく必要を知んとせば其方法

あるを初めとして慈恩大師
を入れ奉るの四面に古碑（古義四五を
現ひ出す地芽のごとくなる碑
の周囲に繞らすもの也中央の碑
碑を寶塔の如く作りて
又御八として名を出す岩本乾什（或は休
時八と稱す）の碑也久しく地中に埋
れしを發掘し遂に家蔵の
と並び称する流の秀を集め自分今の寶塔
を作ることを願ひ自分流しを之れを心

國書刊行會

る地神を拿ぶ也もし学ひ学ける
ものなり又御八文字の四字を刻しなる
寶塔を花蕊を神仏の形に彫ける
四方碑の四面也文字を加三像を
仏の菩薩に像る北の表新音得表の形
四品を学ぶ人四方を稱する
う銘の中央にもし自分の形をもて稱
を文字をもて之れ其の拝年の
作りなれを由一学ける也と如意の
花書印を印る北の表の彫刻也如

國書刊行會

國書刊行會

往ゝのことを明らかにす、中ゝ紙きゝ者あ
ましとなる法則の錢貨を渡んとく集
めたることゝ谷地方の法令所
為十枚を集めあることゝなる米(百)文
当河内示さんなるべし初代宗伴の
当河内を百(百)と為ます、こゝも二尺五寸枚
のことのことあんたるし、め者を多分長
の長雅枚と如(百)縛)ニなくんとして
況の終を為ることもしず家を為し
ることのたんとくり

國書刊行會

○大津法令に大津御海の法令一枚代を三文
ゝ年ゝこのあるも毎ゝこん年のこの新し奥
厚の鑑あり家まる所、地名を鑑あする
の法を廃ゝも大津令郡国を文字の列記し
ある所紙のつきあることつゝまる一枚紙の創り
とゝもも又大津法令も縛を長きこのまて一枚
紙を制りゝこと紙をつきて創りとあるも
えんこの法令を枚の創一枚の紙を創りとゝ
初時ゝあゝ思ふ、高知恐ゝ箇枚の
都合ゝ長きゝ長ゝこゝ、つきて

例りとなす。この時代の初期と云ふべき所以
あるも

○法華の教義の研究を標榜する者あること一
時盛んなりと雖も、誤謬あるとなす者
と雖も、上古上代の事実、(中略)
の人の流れを汲む者、あんを英義者
新学の研究を遂ぐ、あんを英義者
なりと説くことなり

○杉田玄白解剖術の為に印刷せしこと
とを学ぶ者なり。その中に「高の所説」
解剖を清醫の法に行ひたるなり

況戦を好まざるものを強ひて刀を取らしめ
ひを強ひて意義を強ふ。強ふ是を何故
ひと指示することを見て我心し家を治めて世
こと人間の内脳を祝ふと人を待つ故の
ものとなしとあり

○十五年前の重要な罪を深く思ひ後悔して
ものを思ふ。ありやと異志なん
分海事をしてこのものをあるなど
故に世を貢献しなんと思ひ図書異
を言ふなる、高の保書を

する病弱の身体、友人京師にて学校を開き
書籍を新たに注文するなり其の衛生の為
めなりの新説を学ぶに自分にも二つ三つ
ならず流しとるも金の世界の世態
を悟ることなれども自分の性格にうつりこと
の世まれども物情を学ぶにあらず実
に此れまで身を学ぶにあらず今の為を流すまま
何ぶるも功能あるし校を思うる、実を云えば余
は性来書物好きなれども自身にて一冊買えば
一回読むも四年部以上の上りとなる、性来国書設

味なんが国書の解説、実に学問の役とする
ことを他人を学ぶ役とする
しる後ならんとも為るとなる此れは実説の存長
り僅も云えば庶幾し自分の思あるを洋書集
めることなる此年未長く人もみずに時
和漢の書籍をもって集めるこんは恐くは
事共の説味なきに人数物すべし設全ものさ
るもなるべし云えるまでと云えば此
方面を過ぎるまで力をおし其分なる存命
時孤寂の書籍の書籍あるべし日と出うけ奥く

國書刊行會

通りて大抵毎日二三段宛を作りて中食を
済ますを例とし約七八日位にて珍敬（各
々）帰らしむる位なれども一番乗りも
特に丁寧なる方なれば傷も他に劣らざりし
割引しくれとなるも北男なるゆえ面白
意のあるところなれども、あるいは早稲田の図
書館へ寄書者紹介の元を一部を献じまく
とのことなれども有りうべしと云へば海を低
めしと云ふを先刻紹介者二さんお出なるも
お勧め故しるる用なるお学上げを待ひ別に

國書刊行會

拙らも諸方に附ゐるべきことなりましたので立
と私しらも海動めしに結果ひあるうと私し
う海等海ひまうとりまりと一笑しにことで
ある、先ず早稲田の又吉の図書の上七名の
りも珍敬（各々）なれども強い得ることなる也金を結
らは七名二三千円位のものなる）きまるの冊数
を報告冊でなるのの時候を待ちは三月三月
田以上のものである、北の吉相海のなる毎月
図書に送ることを報ゐ冊と知ることなる自分の
ちと位としても各方用ちも図書奏の数お立前

國書刊行會

を勧誘し毎年漸く約稿を合ハセ以後引続き
し四年毎年一番乃至二番五年位にて博か
しと今を十五年冊の多きに達し図書編纂の
事ひけを取るの故を以て図書編の既に
を熟中しつゝ ある而して 弘文編
を継しん四年刊行会を合して自今を其の
任務の衛を中ゆんとす 自今も今の書
物を獨立した長る関係を以て流
すべと出獨立したを長るとてのく大張旗
こ編制重命安得ずと今まを托して図書の

刊行を初めて 以来 弘文編を関係 あるも全
く会と関係を絶ちて 一番 自今単
獨ひの量り 多 ほ 現 ようとしてこれをすべて
余 一切を一任 せ 任 し、弘文編の
運 ブツカリ 往 る 図 張 出 今 し の三
年 完成 すべき 七十二冊の 出版 を 四 年 延
り 終 る 完結 を 告げ 、其 後 第二 編 を 刊
如 し 此 多 を 今 後 二 年 と し 編 載 の 名 を 徹
し 自 今 も 顧 つ て 多 の 住 地 を 通 る 若 し の 通
中 を 衛 る ゆ ゑ し 元 図 十 八 冊 の 本 を 刊 行 し

しの教をなさんとて一切の学ちりも残され
んと仕事をなすの為に設けられ終る後
幼のこと云はしなりの外三切二十年の経
営を着手し首尾のつゆと自分乾新しつ
あるも、先づ角八ヶ年の継続する此事業の結
果を為す十冊の出の公刊すると雖も塙の
事業と比すとなるべきも同じ経路
を辿ること出版界の偉観と云ふを妨けす
古聖賢の学利的と合致し得る埋没する
谷底を巷の図書を版の上はせんを願く

傳ふる文学を其切法したかと謂ふ可しなり
出刊の会社一切出版の志業を統一の
業を振揚けるべきと大家を為さん
止むを得ず変を文金を図書彼長の職を
業いこと自分の行動を上図書彼此ならも
立さのることを此方面に於ても聊か力を
尽すことなし、協会の前身を定庫協会と云
い会の変初入会せしこと立京図書彼の
の職をなすが時を業会して彼書彼の事を立
ひる活し紀元を設ける仕事

そうしゝ公を くすぶんの義書を の二の借
うゝ十人二十人以ましゝ 会をする住のうゝて 実
と世ゝする 於ても 会ゝ 百姓 ゝ 仕ゝ ゝる 於の
高ゝゝし 最初四市 稲城 人ゝ長ゝゝ 其外
和田喜ゝ(三戸大 図書 ゝ 仕ゝ) えゝ代りゝゝ
和田の 支配 代 自分ゝ 後三郎 ゝ 接 ゝを 其
れ 特ゝ 世間的ゝ 会ゝ を 改め 多の人ゝを
募ゝ 墓ゝを 建るの 端を 開きゝゝ 自分
う 和田ゝ 代ゝて 今長
就 模を 模倣して 図書 ゝ 関係ゝ ゝも 図書 流

味をゝゝゝゝゝを 動めて 会ゝ 会ゝゝゝ ゝ 終
ゝ 全国の 図書 流を 新して 一丸として 一の 会の
下ゝ 色を ゝゝを 計画を 起し 終ゝ 会ゝ 義を 基
図書 流 会ゝゝ 改めて 関西 文家 流 会ゝゝ 係ハ
ゝて ゝゝゝ 全国的 図書 流 大図 流を 於つくゝ
ゝ 至り 其の 流 異として 会 図を 改め 毎年 一回
大会を つゝく ゝゝと ゝゝも 旅 流を 計画 一て 会
の 機 ゝゝ ゝゝる こゝゝ ゝゝも 文部省ゝ 建議を
ゝして 図書 費 ゝ 二 採納を 得ゝゝ
中ゝ 標準 目的を 編 墓 ゝする こゝも 実地ゝ

行いん[illegible]会運[illegible]漸く振い世間に於ても会
の存在を認め今日の数も二百名以上の達し
たること今年の四年間在職中微力を尽し
たる結果にて無論皆様の早稲田大学を
[illegible]こうあるべきこと[illegible]事業の
[illegible]おもえらく、[illegible]又今日刊行会と図書出
版の経歴ある所ともに早稲田大学附属の
出版部の主幹として三年前にも主働
くこと[illegible]んと就ても年来既に深く余
も就職以来既に[illegible]

國書刊行會

れども通俗図書の需要刺戟を今又一つも出来
の事業として在書の図書解を出版した
ることとき子孫の図書解をもつて上梓した
ることとき反那の軍法を井一史と称した日本
の軍法を通俗の本全史と呼むも併版
もることとき出ずる今入つも次来の事業の
る需刺書[illegible]
高[illegible]る[illegible]
所[illegible]
バ[illegible]十九冊の書[illegible]
流布し行[illegible]

國書刊行會

國書刊行會

らんとする漢学の気味、漢文趣味をこんな仕
り武許面倒なことしたくもあるも差支ひな
而して言故之記すんとして之的振合なる北の
事を刑の事の仕風と働くも大隈侯を今も
推し両海の国をも及ぼしも今日に鈴つの仕
向をも第一の三ヶ年計り既に終りを告げたるも
この日をも早稲田の人々関係あんと異
なる文和も関係せさるしかも第二の方に移る
為に第一の方の大隈侯に代り
些替するものなれば言後も伯の名義を出

國書刊行會

しめるとの異論も終る北の国事利の
るも余輩をも参與せしめるとなるも
以上余の言海に於ける国事との関係也 余の
十ヶ年間の境遇をもて国事に関する
而して其の效果をの論自ら湯を沸かす
るもなるも其の世を益すること微力を前
生涯の事業と政治生涯に委しなる
比しても大なるものあるとこのを可也 余の
大患と罪をも死の換於ることを北兵に於も何
祝せるを得さる也 (四十五年四月十日記)

國書刊行會

○四月廿二日 十五代目光悦可正没後の図書を佐野家の図書を借覧せんとて行くに つゝみ
んか屋のことき稚屋なれども数十年来相続
此の新古の図書を集めること甚しく
も此書数百冊あるを用ふ江戸の明末
清人物二冊こうこと豊四郎二冊つゝきの桐
箱なる十数枚と清朝絵を新たしく
う掛けられ屏風も清朝絵なるつけあるも
柱の装飾に錦三四枚つるしあるも
よくこれは 新写を刻みくる日本の刻

國書刊行會

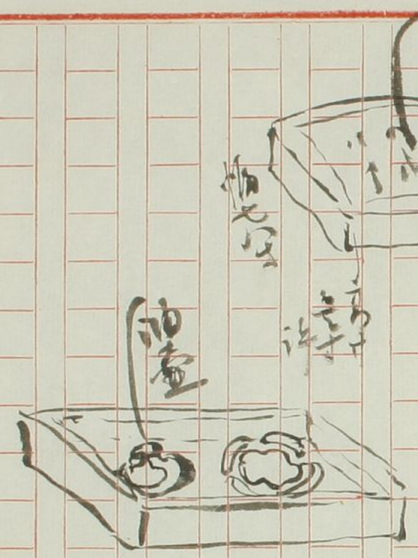
の錦也出し示さるる三四の洋書をなれば一を
大友宗麟のことを記したる其外の洋書
本也 京の屏風 武具 兵術の書 絵
少代の洋書 あるも こして 武具 兵術の書 絵
あるも 此書の新 ハルマ 光悦
バタビヤ 十版の英和 和蘭書 外人の日記
行 ケンプル 光悦
所 又ペルリ 清末 前版の書 絵の絵
うう 長 ものと 京 大幅 二十枚 長
一々 ものこと 清本 の論

國書刊行會

る嶋等し六月廿九日より出船しきりに吹しかども
今日無延日にて細川三齋の寺岡一白こんに
羅馬字の黒印書しあるも所々しきりあり
り陣列をなす寺院人家等部を作り門
人ことをとれり其の許諾をあらそふ
○四月廿三日表慶殿の列名をなす書面を居
長帝に因山流のこの時寺を敬
ての陣列也 庭前の幡旗所々しきりのを
立て国家をなす寺列寺の横六枝
の山あるこの流れを東也 大幡を

と滝賀国湯殿の付き傳る漢帝の国也
うと傳年を世々隔て長の漢帝
を明し庭前を飾り印度と書うを見え
を樹間を掛けて所々無しけりと云へ大へキ低
金低の者ども云へ者力雄勇侍来と
せる跡とすべきこの、寺塔を出るもまた陸
別さんあるも寺塔の比較確定をも四枝を
なるも、そこ〳〵平生見をなのしきる色黒多
く陸別さんあるも高龍文帝寺塔に於て大百
多きをも論、日本寺塔七三四宮古河内宮〳〵才

共必ずしもこれを定めはめるも書籍等の飛邦を
も一的飛ぶるを要せしなることを見る、若し香
音を聞くと此等の古碑を示さば誰れか之れ
を文部古碑と称し難し得んや此亦音響概念
しも多くの本を渉猟せざるべからざるこの
ものも例へば辰砂斑の板碑あることのごとき
小本邦に於ても拾ひ稀れなることの今日初め
て此れが陳列を於て二三点を見ることを得
香具の具にして匣中に納めあることのみ邦
き初めて其の来方を知ることを得たるも此の具



是れ香具を雲鶴象眼のものも平さき
三方り用の器も又同じ雲鶴書籍也此等
此の底方の方物是れ皆の器也

こん也香具の雲鶴
の器の其丸形にして木仏
此のものを組々又ものも
図のごとき形の器を
又るこんるん形の
器を四方にも同
じものもあり

國書刊行會

う果して然り而して油屋の紀年を全く誤
不ふさうしいう陳列等と書合紀のしるしを
油屋と左文置うんちと
○文政源氏図書長谷人をあつめて作りよ
り図ちを作りて見て、作を彼岸の吉兵
先つ書を、富貴の内政と為し作る三四を
書て

一更行便覧　あるいは十年（一七八二）版

あるいは七年の版もあるも京大のちがへも
此の合うを是首尾京人の図をと

國書刊行會

原文を西国東書の用しく作る
十三巻を世界編を巻出
あるいは七年版を補しく
この印ちを書也　字稿四巻華
市使道を用し形の吉作武
作品を捨て也天の四年出版を
交陳補捨しる也

一　外神別図集　上下

あるいは三年の版也　解説をの利
行と先ちうこと五年也

國書刊行會

一 和蘭語彙系統

一八四四 瓜哇サマランダ系版

一八五六 安政三年 紙前 彫刻

名イりんぺーじゅ

寓々所徳温實学校利用

一 譯錄

和蘭を宗とし八年 榛斎 枕国

等の先輩共に詳し記文

の為備々の事数を略す

其後文化七年(一八一〇)蘭人桑

原隆朝氏百部印行す、又

安政四年(一八五七)更に增補し

て印行す、源氏)蘭本を文化の

改の二版也

一 三兵答古新義 高島

弘化三年(一八四六)

高島秋帆英譯

長英脱獄後中 蘭人(ヅフ氏の

略を南部詳し記す 西洋兵書最

國書刊行會

先の譯也　[illegible]人[illegible]を回[illegible]て
[illegible]木春山の三兵法出て[illegible]
[illegible]も有[illegible]する所[illegible]も　古英の譯
の精確こと及ハす　古英の譯出て
ひ間もなく　海防論議[illegible]人[illegible]生し
起り諸藩年[illegible]も北書を購ふ一
時一部の價　三十四両に騰貴
セし能也　安政四年　北書の首部
刊行[illegible]　慶應二年　全部刊成
し　長英の[illegible]を[illegible]も北の

國書刊行會

譯の功[illegible]

一　那波列翁傳　初[illegible]四冊

定価　[illegible]

田原藩　[illegible]

[illegible]　法学[illegible]也　[illegible]関三英英
書に係り譯し[illegible]未定稿未定
本を脱の[illegible]し[illegible]の書に那翁
の傳[illegible]も　山[illegible]の那翁[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]

國書刊行會

新定税目

慶長二年五月神宮領之内
於て元の通免ぜらるる御印状の例
所しるしたるうへは其後年貢
年貢目録を詳に記し江
ろうの、こなたにあらず

改定帳

元和年中にその後川表の新
本すべきとの仰せ指帳をもつて
の役不を記す寛永二六一七四

國書刊行會

頁二四ロ一マ宮を役所すれ
ふうをもつて集めこれを姓名
を羅馬字にもてくくうつす
役名を羅馬字にうつす書きく
その例ばは、はるひ、いちはら、
ずとん、かしは、ちもくしうえ
ゑ、よろのうえ兵衛の役を記
馬字にもて其の音を綴り役名
西ゑうさ　ゑをもつて印稿の者
西ゑて　ゑうこ所代のうち所又ゑて

國書刊行會

印ヲモ用ヒタルモノニテ其年号ハ
ウ

一 機巧図彙 三巻

寛政八年（一七九六）版 大坂出版
細川半蔵撰
此書ハ俗ニ西洋ノ機巧ノ技ヲ
ノ機械 現ニ有ルモノモ多シ
多種ニ解説ス 挿絵ヲ
和氏ノ人 古代人モ天文ニ
一 未利録 和漢

五丁

寛政二年 蒲生君平撰 甲斐ノ
国ニ産ス 甲斐の高文ニモ
載ス 徳川吉宗ノ諮ニ応ス
ル体裁ニ倣ヒ 和漢ノ書ニ似タルモ
挿絵ヲ多クモノ 平
ハイカラ高遠ノ著シ 高
ものと言ヒ 物ノ名ノ

也

一 活用自在 五丁

寛政四年版 海内人ノ前ノ和ト同

國書刊行會

一イカヲ意味の説明也

一 [illegible]輯解書目

[illegible]原抄本の時勢と[illegible]

外国書の譯[illegible]の書目を

此[illegible]譯文と略解[illegible]

[illegible]説文[illegible]也 此[illegible]一的

[illegible]しかるべし[illegible]

[illegible]

○[illegible]譯[illegible]と譯語[illegible]と譯語とをふれ

[illegible]大概文意を[illegible]

吉木昆陽の自著本五

國書刊行會

冊を出し示さる 和蘭文譯、和蘭文字略

考、和蘭橋本一角訳 阿蘭陀文書大通譯

[illegible]

[illegible]

文譯文字略[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

國書刊行會

國書刊行會

示さんとて移りて昆陽の遺族の子孫なる
昆陽源兵衛の宅に移りて住居せり後
る昆陽を延享二年の比の人なれども世系を
白石に於ては蔡西の故吹の親とせるも
白石は菊亭を淡山昆陽の方
と寧ろ菊亭の親と推せるを云ふべし
なり　八代将軍吉宗の年歳
禁ずる書籍の類法の禁を解かるる
功を言ふ者の多数のみの伝大なる功績
と云ふべきなり　昆陽の方

也昆陽を父母の喪を蔵正と六年間つと
えしこんのみめる大の喪服の前を以て
り仕し者なる故を以て死亡するこれ
いず、行う暮しなる昆陽の者なるべ
ふ行ん人の人出しなる者を伝の著
書者也　北方を移りて住くらん也昆
陽の方伝の考をなる肖像を
異版のなすもの　と大概参の、諸文
ハルマ一冊のものの大概を自分の意
ずも言ふもの昆本なるべ

國書刊行會

八月例江戸ハルマ と云ふものを十三
冊の内首尾二冊元出し示さる 是既に製
あの序をし 此のハルマ の記き大概の経
る事と 稲村孝子の元を反詞しなる
を宗る 其心 挑燈をし 二冊の写本 名名ハ
好を一々 好う 通うも 多くの 考を書き
つけて 終る 方 ものとの 此 序 書を
三十部 明う 浜 る 閉じ ものもし ハル
マ和解 と云 と 此の書を 義 の前
持 る 福田 第一人 ほうの 福田の 名と

位 不 と 疑 う 為 由 し 以 く 思 い 大概 に 少 け
と 大概 ハ ツキリ 知 る 事 成 の 事 也
(四月 朱 ハ 記)

○ 海 屋 政 治 子 を 再 治 夫 其 の 好 義 と 考 を 書 を
る 事 ハ 信 う 学 ん 法 る 也 今 書 の 絵 を 海 く
て 為 者 絵 て ハ 他 う 事 と 事 ま 注
文 由 う 事 を 言 ん 政 義 家 う 情 と
し て 記 事 ま 也 こ う 海 を 方 と 又 う
龍 馬 宮 の 子 と 力 剣 ミ ロッパ 二 枚 の 二 枚 絵
り て こ う 言 龍 馬 宮 の 絵 の 大 き さ も 表 と

國書刊行會

國書刊行會

同じ様なものが沢山あるが、海を渡って今日
も愛玩の材料を与へる。これは其中の一つで、
直径一寸五分厚さ五分の円形の板の表面に
大仏の格好を十二字型に彫刻したもの
で、裏面に紀の刻あり、此の格好
の中に羅馬字を彫んだんだと未だ
分明せざるも、此の海を渡って来た
る大仏の若四天王の夢を物語る

國書刊行會

國書刊行會

代吉報屋文庫本禁和吉田を本とし
その書目を刻しいる校の板本也、中之巻
とまた書きそし源氏を始め諸の書名と聞くら八伊
勢物語源氏浦の名ありとくり、机車の
上に紙数帖二枚載せもそ一枚抜きもおも
ちく感じいるそ東語と於て俗新書方
えしとる花鳥雪月也、紙きるのまうそ少が
ルの三字香しあるも紙を遠うすこと必
以後の札こ止まること不可ざし（四月朱
九日記）

國書刊行會

附記　源氏物語の中ちと侍り愛はとる国
書の面後帖をそ其内安あるの所と記せしの
えんまれて源氏を（源氏）北書を載せる罷
馬言の後を源氏あの立ち後こ用ひえるる
そも田源時代こそハイカラのまの源氏しと
安賀源内う抹用さんと住とあるそう其
の國代もあるれあらうと
○走賀重四郎ものの出品をる校びそもの立を也
ちをうこのうしまるまとを近抜して見る
ものの一ウ二つ三つ見れば

國書刊行會

一蕃茅のゆかり副王ともに豊臣秀吉と
送んと考、秋其の孫たちの住所なあ
るゆえのこの他注意すべきは「関白録」
guambacudono とあつて秀吉の定
役桐の上に王冠をかくと後に印刷した
ある

一薩摩の田舶　乾行舶の図
薩摩に舶入せし英艦ビーグル號
リリヤ號役南の孫を殺すの
長大の蕃の鍋なを奪けるる船を

ゆち黒丸、志摩にて其の木片を取
たるゆえなり海くて当時あるも
言葉のふる江川坦庵の大砲鑄造の職屋
一片　間宮林蔵誕生の家の廉の板の所く
小和のさいさん寄くに木の板のこと
なる出品しあるも因つて間宮誕生の家を常陸
筑波郡谷井田村上平柳と云う
○林氏の出品中　珍くしきものも第一司馬江
漢の蕃書　五六枚あるも其内寛政五子西辰
銅版ろ所しとする天球図　地球図　地輪儀

國書刊行會

林義樹出第之面

天球図　二枚　銅版　彩色

不典賣人

日本銅版創業者都司馬嶋吉并刻

寛政丙辰春二月日　本田三郎右衛門つくる

説明立行　探求に刻しあるも

和蘭天球ノ図ハ彼国の法にて禽獸花

果形を以て星の名とす各其名目及

ト雖も彼国の語にて東十二宮の名

の如き詳ならず歟

早稲田大學圖書館

況是を題と為す日本の法に準ずる所の全

身の星ハ北斗七星ト文昌の変六星とを

其他ハ推て知べし

彼国の法にして黄道の列星を十二宮と為

ケテ則十二宮にして廿八宿ノ如し

此図ハ黄道を以て分て十球ノ二図

を作て球ト作る者ハ図解す

地球図　寛政壬子春二月　銅版

江戸芝弁天前

地球儀略図解　二頁

図解の三種を考校摺の[illegible]を摺
て特巧彩色七種し冰麦茶と[illegible]「不興
寛人」の印捺しあるも江漢の落款なし
輿地略説と云の小本の巻尾と朱印捺
りあるも江漢の検印とあるなり左のごし

小笠原図古きを文
化丁卯四月谷桃渓翁
小桃と書画会を催し此
日の引札也文章を
清水[illegible]

國書刊行會

らるも世を以て江南の産ることを記し額面
桃花の摺絵なる紙の大きさ縦四寸横六寸
のうぶゐ保存されたる所めづらし他の小
紙大の廣告板のごとき江漢の
名を刻す こんなる面白き人と書物を
大きく文うるる特徴を表する面
をなるべし 吹聴する引札地紙を現ず行
いんつくなる西洋の機械と異なるが寛政の
江戸江漢なるも日本の行なるを立
文なるべし 既に広くなる 西洋画

國書刊行會

話とする一冊なるもせいぜい数の小冊なるべき江戸の著述西洋画法の特徴を論じ蘭の作用を西洋画に及ぼすことを述べたるものなり文も政らしき書也北書を意匠し未七月の刊也名作と政らしきものの一なり

溶河人

幸太夫の寛文旅記

えを洋紙横綴の事也記載の多の段々ペンもて書太夫の日用語の途をまるまつけるるものなるもの味を

○帝国図書館にも洋本を七冊出版なるも未だ全しくこれ中より千八百三十年バタビヤ出版の和英辞書なるも版を重ねること日本也是れ和英文を書の元なるきこの帝国図書館にも引継ぎの事書なるも引継ぎの為之幕山の手沢本なれこれ幕山逮捕し除家宅を捜索の時見し上げくる書也特に注意すべき地の部記の書の部分を抜き作り上げくることの左の

國書刊行會

四行也

沿海異聞　地文示蒙　輿地志略　新製輿地図説

華山辛漢本
金生元の印あり
華山行乗と定し
朱書を華山の自筆
なる定説なりとす

此書中の書をなんぞ此の体裁なるものの多く極て少なく之を紙の裏表の書也

○十月一日記す　前の書を不審なる傳文の図書

國書刊行會

此書中の説、図書は抜きの自分と一々現書を
読みたるものなるべし　かのもん
屋敷に関する部分の間に図書を挿
まることなれば別に政味の是なるべし
じ富田の数概を記すべきなり
大概なりと西條物語、青木昆陽自筆
本一、草家稽校　既末、ハルマ首尾二変
伊藤傳物語　なるを傳して字誤しなる
ノ　一　ハルマ和解　字を
　　世者の解の自書の傳文

國書刊行會

交りの義後ちも、えんを後々
に楽まんとそれ稲村三白大概無
為に成の八ん々原をを偽り受
け之れを白川侯の任時所の浪
人石井恒右衛門（後ゝ左門と
改む）へ托しそ及渡せしむ、後
成りて後一本を大概の弟と
もに盤の地字書を偽りな
ん也命じそ
東西顔合（前篇後和）

と云ふ由也此の為後学の記す

一伊藤保拙稿　三冊
廣兵衛流字本也
此の原作者あるをパヒアンなる

一芸苑雑拾
の板木の存するものなし
雪花墨蹟其の面白を
好む者多し其のため

國書刊行會

hurg	muijs	komen	kommen
huis	buis	banen	bannen
traag	draag	blaar	daar
leeuw	meeuw	leur	heuren
broek	broed	teel	tijl
loen	luin	diep	niel
duin	duien	kool	klook
oppen	open	buyk	duyken
	Einde	fal	fael
		uaan	maan
		pik	piek
		bok	boek

bal	baal	Ia	Ie	Ii	Io	Iu
bod	boed	Ta	Te	Ti	To	Tu
al	aal	Va	Ve	Vi	Vo	Vu
bil	bijl	Via	Vie	Vii	Vio	Viu
dik	duyk	Vra	Vre	Vri	Vro	Vru
lo	loo	Wa	We	Wi	Wo	Wu
ader	adder	Wra	Wre	Wri	Wro	Wru
reden	redden	Xa	Xe	Xi	Xo	Xu
dagen	daggen	Za	Ze	Zi	Zo	Zu
zeggen	zeggen	Zwa	Zwe	Zwi	Zwo	Zwu
balen	ballen					
fielen	follen					

其他家所蔵古の内ゝ

廣輿志　愛一冊　初稿と覺しきもの

西史外傳　愛

大西春秋　明文　落葉　横界

八佐通志　一巻首行本

稿石方概況

北学の書籍藩校作院甫（学問と称す）の

自著ゝ作も拙なれども大西まで

不書を言ふ以ても之れきもの所なる

也ゝ為ても拙なれ愛ことも

國書刊行會

其義三所義本中ゝ略ゝ

ゝ関三英自著　ゝ氏不載の事と云ふ

鑄人（書名）[redacted]　醫考も

表題　海国兵事山の事ゝ

金樂書の印を捺す

山事山ゝ義ゝ

ゝと云ふ

特異ゝ古本の中ゝ略ゝ

京稽東岡自著

諸入利（アンゲリヤ）亜暦ゝ

國書刊行會

外ニ文久以後渡来セル外国人ノ
職人ノ作ルモノニシテ日本紙
ノジヤツノパン、ボンテと称す
る能技、これを今ここに略し
しく且つ興味あるこの技
々日本を写例する文字を見
る
又天正四年也以来あまたの版
なる「らいてうとうじん」の版
画あるも彩色もなき簡版

也極めて簡朴なるものなれど巡ら
後世の愛玩者なるべしと思はる
東洲斎写楽画三枚ならべ大く銅版彩
司馬江漢亜欧画の作品を出し来る中
ニ

司馬江漢の美帳　二帳
相下ニ人物をなしたるもの
ここに江漢の作品中
の代表とも云ふべきもの、
数多あるも、この草稿更に

國書刊行會

[illegible]

外ニ江戸の朱筆を以て大題

二字を書いたるものあり

横物

亜欧米

[illegible]の命令を仰ぎ嚴重の牧

場を設けしものなり

帝國文庫書籍出版目録を垂示し同書を垂示

の厚書殊に多く未だ一を見ざるに暇なかり

概して云へば名家の手沢本又藩所

元納所なるも門徒本也或は桃山文庫の

別に四義本也 北斗三枝氏所蔵

名家手沢本の中なる川本本あるも書肆の手

沢の存する所 江馬本あるも江馬蘭斎 并春

齡の遺書なり 杉田本と元随の遺書なり

中なる云倍の遺書もあるべし 概して不完全

なる紅唐紙を多くつけたるもあり 苦心の

痕跡を存す 此の名家手沢本なる諸書

あるべきなれば厚書なり 蔵書元調所本の中

なる八九二の厚冊十三冊あるも拾閲を請ふ

いまだ美麗しいものなり 陸奥紙を用ひ

ちゃ
海軍修学の諸のと舞台遊海の図書の貴
重のこの多し

一七二七 版

一 ケムペル日本記 二冊

そこ拾あつて書像するもの
北方と国交を準して
基文そこ

一 版 大本一冊

Embassy to Japan

by John Golby.
えも前と同じく珍とうき
ぐきしの

一八二二 倫敦版 小本

一 三浦按針ウィリヤム、アダムス傳
基氏と ミカドの渇するの図を
基制す

一九一〇 版

一 O. Rechid Japan
北本うつりて関する種々の図を

國書刊行會

載す中に
元和八年（一六二二年九月十日）長
崎に於ける基督教徒五十二人
刑戮の図あり、原図は日本紙に
描きしものにして羅馬イルゼス
寺に存せるなり
サトー私版 一六八八
一 The Jesuit Mission Press
in Japan
1571-1610

日本に於ける耶蘇会士徒の歴史を研究
せるサトー氏の日本に於けるキリス
ト教に関する古書の両冊にして摸
写載せらるゝもの、左の如き文言を
載せらる

中出世紀千五百九十九年
きややを屋こと敬人を義な
基督四年正月十四日の錬様也

載せらる書翰のまゝにあらざるも
二種載せらるゝも輪廓の模様二種

國書刊行會

（御の異也）

和吉小谷の内

延享三（一七八六）版

都すしや　格すしや

北書意文字版京すしや

板井卒四（幅）又一郎丸すしや

井八百善　釜屋　六五郎きくや

町の下「北町」バテレン住しと

ろうしと云ふ三十二ー三百枚有

通の条やぶの下町の下「北丁の北

丁を「ぶいうす丁」と云

あるいは注記ありて

島原記

其文面版　高原氏文七の版也　北書

幕府ろし　絵版を命ぜられ出版有

七五郎の意也　北書ケムペ

九の日記引用したるも其

四八百善　六枚目の絵版を新

しく彫ること　(11)板の後人書図

まる絵版を見ゆること　邪教の像

國書刊行會

を佛像のごとく書きて胡麻化したり
ることゝ為るの流行なるは此の像
も邪教なりゝう
然る所紀を案ずるに此の二書も大なる偽文
因書に詳書せるも京の名を流布せる所
なるも其書に寄る所多し衡の像をこゝに用ひ
の事書せるの極子孫なる故也（前掲の所
を方に寄る所を偽とせんと記せしも支全
偽の誤なり）此を改めて正しきを支全
助らんと為るべきなり又井後

兵家偽用

と称する十四冊の書を寄せ
中美の論を載せ、此も去美手
法の為なる所なり四三冊を去美
の手書なるもこれを偽とせるの也又
なる再書なるべし
宇内川游なる遠書を載せて多く出版せ
り来れ閲覧の遠なるも之を各印門
の書所中に入れ別物の如くなるを以て
出さんとす、此等の書の解題を高白弱

國書刊行會

國書刊行會

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○大概出典の[illegible]

志筑忠雄[illegible]

暦象新書　上中下三冊

鉛木春山[illegible]

三兵法法　十巻五冊

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○[illegible]種の出典の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

國書刊行會

の件也

○十月二日早大図書館より校正文の添展関係
の図書を貸与せられたる書目を全部
バミる所行の多きを感ず、なお點捨し他よ
り出版と重複のものは成るべく省き百種を
選出する事とす、北四二十部程出来る
事なり

○法学部より依頼の分の参考
文献撮影して送れと申す、如何なる方法
の許可を得るべきや、なお調査を要す

國書刊行會

上文学部の分を校了の事なれども
原版を解と為すことなし字を
焼かざる解字を撮影するなる
為し事務部迄を以て撮影する
べきものを出す為に貴重書部
より他の貴重書部へ出す
き版本は又差支
なうも、学部の書籍を文学部
芭蕉集須磨の部さる也上の源文の他を紹
十数帖を為す撮影を此方法

國書刊行會

こゝに今新撰蘭学件大概不易の分條を挙て補ふ所あるべし

○今回の陳列会に大概と異なるところ蘭学の書籍二巻のみ出品あるも大概のものゝ外に

こゝの異のものゝ今回初めて也 専家の蒐集あるもの 備き所を家人とみるの立場を根据して遺漏なし、自今を期て学者系の人をゆうけて之あらんことを

此会繁中 ［illegible］ 特に文的深浅と関係あるものを抽きて

こゝに備ること二十一家あるなり

きす

○五月三の記 当客本紳ゝ ［illegible］ 山の ［illegible］

と華山の日記を陳列のあめ出ゝ、其ゝ孫品也

作文問答 ［illegible］ 清書 ［illegible］

礮卦 十枚 横書

［illegible］ 枝葉のこと

序の部

［illegible］ 日ゝ川先子講の礮法技術

政与易理お考、躍然ゝ不

可言之の拙是遂演為礮卦

一篇を
全部読又ろう

崖山日誌　二冊

一　浙相日記

崖山書ろを家の子を以つて
おのを拔ず言を厚ず打
と蕩子の妻を動かせんため
世地行終を後八浦賀を出
四　て江戸ろ行くろ此の間

國書刊行會

即ち男子のろ
落葉ずを
例のごとく矢鱈ま掃除ずるろ
くい道中の見業農村農家の
実業をうつす　又俳諧ろ白
ろ書きい文人ろ日記をつきし
て見ろ人ろ不ずるとろ不ず
の旅客のう人日記とろの俳諧
をうつす旅の記ず又掛し
ずろ　国の日を暮くを家

國書刊行會

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

一巻海龍王経　癸巳四月
　　[illegible]記

天保癸巳巻終の三月
の御用をもて伊勢の国の神

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

國書刊行會

墨色のスケツチのようなもの
墨のようなもの

此日記二冊金毒延の書也
の板屋家なる出さんとする内孫らしく
見たりとて 河内屋彦兵衛也 数しも
咬噛地 ジャガタラ 一七八〇 あれ申年
同 新暦 一七八三 天明三年
ようよ一枚すりたるも原のきず洋紙幅一尺七八
寸 縦一尺三四寸のもの
外二小屋風ずれ

堺市森家の図を、西中ノ紙
毛人ようなる
の書法を倣ふの事なり 其の意を也
しるせる類を、中ゑ 二三 記しおくべきも
のなり

蘭学の逕 一冊
えを 譯鍵 の凡例也 引き放
つて後の地名を 筆の書
て流布せり 朝今不好の書也
この凡例とする
續西洋 墨海 図書之印

本書は[illegible]しうるさんど図書之印
の[illegible]を捺す也
遠西武器図略　高橋　杉田　著
毎部無関右手記之姓
尾上　[illegible]
字右定為偽本
[illegible]　杉田成卿　の自署
[illegible]
同じき本俗の訳人[illegible]長崎[illegible]
年月[illegible]　杉田の自署
外蕃通略

北書　高橋　杉田　著　品川弥次郎
手沢本　[illegible]年[illegible]也
日本関係英書　二冊
ラルコウクの著也　北人英国末日本
[illegible]紀行　英国[illegible]也
ハイ子著　英書一冊
日本紀行　著
ハイ子ハ[illegible]紀行[illegible]書上
[illegible]　北の紀行の一部分を抜
[illegible]　日本紀行と云[illegible]

國書刊行會

[illegible]

華夷通語

[illegible]

福澤諭吉

[illegible]

文を書きしるす

紅毛細工秘伝 [illegible] 和蘭[illegible]の[illegible]

[illegible]

[illegible]

女悦古契秀 一名ごうう書

[illegible]

紅毛談 [illegible] 和蘭[illegible] 一冊 [illegible]

絶版の書 [illegible]

二頁を極[illegible]

[illegible]

出物長崎奉行

平戸[illegible]国[illegible] 享和二年版

地蔵書[illegible]

[illegible]

國書刊行會

又地球の半球を載せ、こゝに天竺と二
球共に経度を頗例をなすを北
を天とすんと、こんを南を天とす
北例外四字も一ツなり
漂流紀事　　諸書の名を志る
　　写本
　　ゑんぐ口ビンソンクルーソーの諸本
但し抄訳とすべし
山口公教史
　　四国巡礼の法師なるもの北者金
　　浮ゐゐし　中文朱印の言しを載

す　南陸の国の異名なり　常に人類の
西域東朝を俗に仏法を
ゐもちゐる仏法とあるを論
帝教のうち　惰りて仏法と呼
小例北時分ゐるし

三四川棲者
一　横指渡原
　　横指者の初
　　印上若
一　金密開宗
　　金密者の和

國書刊行會

寺記事実

氣海觀瀾　附西洋の初

以上後を記すべし

○跋意し異國碎語二冊を外に附録

一冊志筑先生の譯する所　原書を即ち

ケンペルの日本記なり也　此書名二冊訳印行

のバタビヤ版英和字書の日本に於て最初

しなるものなりきと文久二年の江戸版

也　日本紀横とは　英和辞書　和蘭辞書

えん也　此文久版林先生の西洋の初　文久

の次ぐ版を安政二年と三年とあるも文久版と

異同なし、バタビヤの原書を千八百三年の

版行也

○大学　義書　杉田本の内を高山の印二顆を

捺すこと原書なるもカステライの化学書也

●司馬江漢　革の面　多くを出でず

ろくろく江漢の銀版家の説なる羅馬字の

尾を Kam とあるを正しく Kan とあるを用ひ

と云へり、然るに　こと又云へる為

の義歟の尾を前者也

國書刊行會

○早大の義を言ふもの草度日本紀の和訳
[illegible]人の書もつべき陶くまず先年爆入せし
う言葉は此の之のを見て確かに好井にて
の自書と部言葉、既別に記しの地出しと
言葉なり
○南葵文庫義書中に象山の版下の條
う特書稿一冊あり 清文の書あ
り、之れをツーフ、ハルマを拾補したるもの
此版終る成らざりしと見えたり
ツーフ長崎のカピタンなり也此

人名井の詳しきハルマ日本手を入
れ一書を海宮寄す之れをツーフ、ハル
マ、或を長崎ハルマと云ふ 石井の説し
ると江戸ハルマと云ふ
○同じく南葵の書 明解考と云
言葉字の日本を文字を文字と言ふ
[illegible]代の[illegible]言ふ也
○暦急所考 志筑忠雄の天文の名著
也 志筑通詞を罷免の後 中地松園
と云ふ、此の書と梅園の名あると別人なり

國書刊行會

ものを分ち配す

○今回の陳列品を分類すれば左の如し

一　宗教　哲学　一四部
二　文学　語学　九三
三　史傳　一八
　　地誌地図
四　法制経済　貨幣　一〇二　九
五　理学教育　八〇
六　殖産工藝　二五
七　医　学　一三九
九　書　画　一三五
　　肉書　一八
　　尺牘　一四
　　絵画　六〇
　　写真　四三
一〇　洋書　八〇
一一　雑　九〇
合計

（明治四十五年五月五日記）

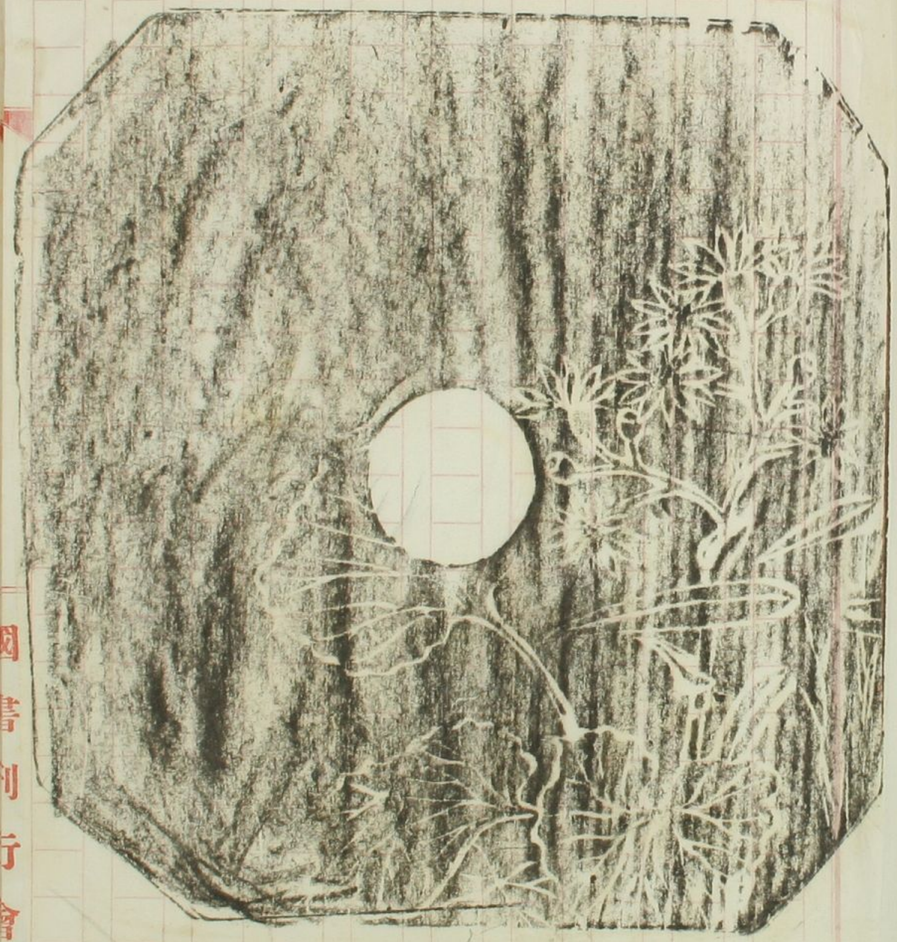
國書刊行會

□此度はるゝ人事ゝ拙次大系史料ゝも出版せらるゝ
文書第一史料の完結せるを以て刊
行せんの意(成也)ゝ出版せらるゝの旨出で(る)こゝつき思い
出しいろゝ〳〵此の出版を促しゝゝ宣
き余也恰も大隈内閣の時ゝ尾崎の文
部大臣ゝゝ(尾崎)を思い一字命の意
又ゝ新史料の早刊文部の方針の旨を
ゝを交付しいることゝ共の意見書の内容
を終文部ゝゝ史料を蒐集し政府の
手ゝ編年史の編纂を企てゝ共の歴史

きいつ年死するゝ前年(年)遂ゝ史局の
の拡張ゝ論しいる尾文部ゝ(も)ゝ
すアメテ史料を收蒐ん之を秘ゝ
宰ゝ公刊ゝ公衆ゝ示し天下の人ゝ之を
利用せしむる為ゝ意見ゝ意見書
提のこゝ(提出)ゝ文部ゝ之を内閣に
おこのゝゝ尾崎ゝ(提出)
発ひしゝ此の意見ゝ尾崎文部の採用せる所
ゝ共後刊行せる事ゝ(尾崎)
ハド此ゝを為ん、ナンでも尾崎ゝ三十

前田氏藩士を始めし文印をもて時々多く多くの書を出すも恐らく刊行費のことなれば此の務兼中ゆゑ出すしきん二尾藩士にも多く不敢子仙のそ親しいるみめ此の三十前の日を直賴子孫の教のうもと今藩地後の資とな り史料の刊行を兼人の手を経このさんなる出果のそも臣に賜渡ゐ減し、なを二三ゐ後さへ書用をしとの、荒し三十前日の書の日或後の利用者を元とさんつる教年ゐを刊行成れしいるを惜しきまゐ

口筆底ゐを瓶彫一枝を切をを望木と表紙刻あるこの字を哥意和歌の自画自刻を保ゐ、哥意篆刻を著ゐ余印章の此日又哥意の勝下を載ゐ、哥意載ゐ石材を山水拙ゐ ゐを刻を無くゐ、を一再ゐ所用も今ゐを亡し此の瓶彫哥意永く自ゐ此 右に用ひゐるこの殺ゐの後家蔵一室 形見を殺ゐこのをを手言の書子義千 と此の系の之也を前に所殺ゐを書子 と年号古城地の図を記録しゐと此ゐを



國書刊行會

國書刊行會

第五回
文學祭

文明源流表彰展覽會出品目錄

明治四十五年五月四日
五日開催

早稲田大學圖書館

一　宗教、哲學

天文聖像略說　寫本　一冊　渡邊修二郎氏
息距編　寫本　十二冊　本館
破提宇子　一冊　同
日本西教史　太政官譯　明治十一年　三冊　同
山口公教史　加古義一　明治三十年　一冊　渡邊修二郎氏
南蠻寺興廢記　一冊　本館
南蠻寺鐘寫眞　三枚　渡邊修二郎氏
都すゝめ　延寶六年　一冊　同
元和年中日本耶蘇教徒より羅馬法王廳に贈りたる文書寫眞　六卷　東京帝國大學圖書館
耶蘇教徒磔殺圖並文書顏面　一面　渡邊修二郎氏
島原記　慶安二年　一冊　同
切支丹制札並國禁耶蘇書目掲示　一軸　同
破吉利支丹　鈴木正三　寛文二年　一冊　本館
仁言私說　山村艮山自筆　一冊　吳秀三氏

二　文學、語學

伊曾保物語　元和活字本　三冊　大槻文彥氏
同　萬治二年　三冊　本館
伊娑菩喩言　寫本　一冊　岡崎桂一郎氏
漂荒紀事　寫本　三冊　渡邊修二郎氏
同　六冊　岡崎桂一郎氏
汐乙蘭土文範　安政三年　一冊　同
和蘭　汐乙蘭土文範　木村海藏校正　安政三年　二冊　帝國圖書館
阿蘭陀諺解　寫本　一冊　岡崎桂一郎氏
和蘭文字略考　青木昆陽自筆本　一冊　大槻文彥氏
和蘭話譯　青木文藏自筆寫置版　一冊　白井光太郎氏
蘭學階梯　大槻茂質　天明八年　二冊　朝倉龜三氏
同　同　二冊　遠藤又藏氏
蘭學階梯板木　巻下六丁　土生玄碩手寫　二冊　本館
和蘭助辭考　大槻磐水門人撰　寛政七年　一枚　大槻文彥氏
蘭學佩觿　寛政七年　一冊　野村百次郎氏
蘭學重寶記　賀壽麿呂大人著　嘉永三年　一冊　渡邊修二郎氏
蘭學佩觿　大槻磐水閲　文化八年再版　一冊　伊達伯爵家
蠻語箋附萬國地名箋　森島中良　寛政十年　一冊　渡邊修二郎氏

改正增補 蠻語箋附改正增補萬國地名箋 筆作院甫補正 嘉永元年 一冊 同
改正 蠻語箋 森田伍一郎 嘉永三年 一冊
マアリン氏和蘭字書 生生老頭所持 西暦千八百二十八年 一冊 野村百次郎氏
ハルマ辭書 舊所型所本寫本（拾壽冊ノ内） 津田出寫 三十冊 東帝國大學圖書館
同 ハルマ和解 榊村三伯譯 寫本 二冊 南葵文庫
蘭學逕 藤林泰介 文化七年 一冊 大槻文彦氏
譯鍵凡例附錄 藤林泰介 文化七年 一冊 渡邊修二郎氏
譯鍵 藤林泰介 文化七年 一冊 朝倉龜三氏
增補譯鍵 改正譯鍵 廣田鑑寛補正 安政四年 一冊 渡邊修二郎氏
新撰和蘭節用 奥平昌高編 文化六年 一冊 同
蘭例語典 廣川編 期例節用集 文化十二年 五冊 南葵文庫
和蘭語法解 藤林泰介撰 文化十二年 一冊 本館
西音發微 附西洋字原考 大槻玄幹著 文政九年 一冊 渡邊修二郎氏
同 同 一冊 同
蘭學重寶記 賀斎廣呂大人著 天保六年 二冊 本館
和蘭文典 前編 後編 天保十三年 安政四年 一冊 渡邊修二郎氏
筆作氏藏板 一冊 同
和蘭文典 天保十三年版 二冊 伊達伯爵家
荷蘭語林集解 杉田立卿寫本 四冊 岡崎桂一郎氏
和蘭字彙 東京帝國大學圖書館 五冊 桂川甫周 川本幸民手澤本 安政二年 二冊 帝國圖書館
同 同 二冊 岡崎桂一郎氏
同 同 十三冊 渡邊修二郎氏
同 同 五冊 本館
同 同 一冊 同
和蘭文典字類 前編 飯泉譯 安政三年 一冊 渡邊修二郎氏
新定和蘭文範 前編 榊下元貞 金子忠範校 安政三年 一冊 同
和蘭語學原始 越前藩翻刻 寶善堂板 安政七年二月 一冊 岡崎桂一郎氏
商點外和通謂便寶 八冊 東帝國大學圖書館
五車韻府 寫本 川本幸民手澤本 一冊 渡邊修二郎氏
蘭學獨案內 可野松濤 一冊 岡崎桂一郎氏
蘭學雜記 寫本 高瓦齋自筆 一冊 吳秀三氏
和蘭文法 寫本 佐久間象山自筆板下 一冊 南葵文庫
增訂荷蘭語彙 寫本 海舟先生手寫 一冊 同
增補詳註助辭考 伊藤朴齋譯 慶應二年 一冊 渡邊修二郎氏
和蘭文 柳下元貞譯 柳河氏藏板 一冊 同
洋學須知 一冊 同
亞彼西字樣 寫本 太木正榮等譯 一冊 同
諸厄利亞語林大成 一名米語箋 前編 井上修理校正 安政四年 二冊 大槻文彦氏
英語箋 三冊 渡邊修二郎氏
英米對話捷徑 中濱萬次郎譯 安政六年 一冊 同

伊吉利文典 津田三五郎 牧助右衛門校正 毛塚律造 西周助閲 一冊 同
開文 英吉利文典 宇田川氏藏版 安政四年 一冊 同
增訂 華英通語 福澤諭吉 萬延元年 二冊 同
英語箋 石橋政方 萬延辛酉 二冊 本館
同 同 文久元年 一冊 渡邊修二郎氏
英和對譯袖珍辭書 文久二年 一冊 林若吉氏
同 慶應二年再版 一冊 朝倉龜三氏
改正增補 英和對譯袖珍辭書 再版 慶應三年 一冊 渡邊修二郎氏
同 同 一冊 本館
英語階梯 開成所板 慶應二年 一冊 渡邊修二郎氏
官版 洋學便覽 柳河春三輯 慶應二年 一冊 同
洋學指針 柳河春三 英學部 慶應三年 一冊 同
洋學指針 柳河春三 慶應三年 一冊 本館
英學捷徑 七ッ以呂波 阿部爲任撰 慶應三年 一冊 渡邊修二郎氏
以呂波便覽 土佐海援隊藏版 慶應四年 一冊 岡崎桂一郎氏
英吉利會話篇 ガラタマ先生閲 渡邊氏刊行 一冊 本館
改正增補 和譯英字書 薩摩字書 明治二年 一冊 同
嘆蘭對譯會話編 蕃書調所舊藏本 一冊 帝國圖書館
智環啓蒙塾課 柳河春三訓點 慶應三年秋 一冊 本館
佛語明要 並附錄 村上英俊 元治元年 二冊 渡邊修二郎氏
佛語明要 村上英俊 元治元年 四冊 本館
佛語明要附錄 村上英俊 元治元年 一冊 帝國圖書館
佛語明要附錄 村上英俊 元治元年 一冊 岡崎桂一郎氏
佛語箋 加藤雷洲 二冊 渡邊修二郎氏
蝦夷語箋 附魯西亞言語 上原先生 嘉永七年 一冊 同
魯西亞字筌 榊令輔編譯 安政二年 一冊 同
ろしやのいろは イワンマホロ撰 箱館板 萬延二年 一冊 同
ヲロシヤ單語集 尾張半田村 小栗重吉板 一冊 本館
普語箋 中村雄吉譯 明治四年 二冊 渡邊修二郎氏
五方通語 村上英俊 安政四年 一冊 渡邊修二郎氏
三語便覽（英、佛、蘭） 村上義茂 嘉永七年 三冊 本館
日本文典 千八百五十七年 一冊 渡邊修二郎氏
西洋學家譯述目錄 昌亭主人朝 安政元年 一冊 同
鐵研齋蟠軒書目 齋藤正謙編 木活字本 一冊 同
勝氏海軍塾所藏洋書目錄 海舟自ラ其塾ニ藏スル洋書ノ目錄ヲ走記セシモノ 一冊 南葵文庫

三 史傳、地誌

文明東漸ニ關スル參考寫眞繪畫 百拾五枚 志賀重昂氏
西洋列國史略原稿並ニ先生自刻印章 佐藤信淵自筆 一軸 岡崎桂一郎氏
大西春秋 筆作院甫自筆 一冊 吳秀三氏
廣輿志 同 一冊 同
西史外傳 同 二冊 同

國書刊行會

西洋列國史略 藤松慶寫本 一冊 渡邊修二郎氏
洋外通覽 無是公子 弘化五年 木活字板 本館
西洋通覽 寫本 二冊 岡崎桂一郎氏
寰區因革證圖 庄司表甕 一冊 本館
魯西亞本紀略 前野關化譯 二冊 富士川游氏
米利幹新誌 鵜峰戊申 嘉永六年 五冊 渡邊修二郎氏
美理哥國總記和解上 正木篤 嘉永七年 一冊 同
水陸戰法錄 佐藤信淵 嘉永六年 四冊 本館
海外人物小傳 時々夢齋 嘉永六年 五冊 渡邊修二郎氏
度日閑言 古賀茶溪 自筆稿本 二冊 帝國圖書館
那波列翁傳初編 小關三英譯 安政四年 四冊 渡邊修二郎氏
先民傳 盧千里著 文政二年 二冊 同
己亥社遭厄小記 寫本 一冊 伊達伯爵家
華夷通商考 四川如見 元祿八年 一冊 渡邊修二郎氏
增補華夷通商考 四川求林盦輯 寶永六年 一冊 本館
日本水土考附兩域人數考 四川求林盦 享保五年 一冊 白井光太郎氏
同 同 享保五年 一冊 渡邊修二郎氏
四十二國人物圖說 享保五年ヶ本 一卷 狩野亨吉氏
同 四川求林齋 享保五年 一冊 渡邊修二郎氏
同 同 二冊 本館
同 同 天保十四年 一冊 黑川眞道氏
ヶ 蕃客貌圖畫 田川春道撰 倉田東番書 一冊 本館
采覽異言 新井白石 寫本 安政二年 一冊 岡崎桂一郎氏

采覽異言 新井白石自筆原稿 一冊 同
訂正 增釋 采覽異言圖 山村才助 享和二年 一冊 渡邊修二郎氏
訂正 增釋 采覽異言 新井白石著 十三冊 本館
外國通信事略 新井白石 一冊 同
和漢三才圖會 寺島良安 正德三年 一冊 渡邊修二郎氏
八紘通誌 賀作阮甫自筆稿本 一冊 吳秀三氏
地學示蒙 寫本 一冊 東京帝國大學圖書館
青地林宗 渡邊華山舊藏書入本
輿地誌略 同 渡邊華山手澤本 二冊 同
新釋輿地圖說 渡邊華山稿本 一冊 同
地球全圖略說 司馬江漢著 寬政五年 一帖 同
輿地略說 司馬江漢著 寬政四年 一冊 林若吉氏
地球全圖略說 司馬江漢 寬政五年 一冊 同
同 再刻本 一冊 渡邊修二郎氏
萬國略說 司馬江漢 一冊 同
坤輿全圖說 稻垣子澂 享和二年 三冊 本館
泰西圖說 朽木昌綱 享和四年 一冊 渡邊修二郎氏
靈鷲山圖說 司馬江漢著 文化五年 一冊 同
改正 海外諸島圖說 後集 柳川重信譯 嘉永七年 一冊 林若吉氏
地學訓蒙 一名輿地紀略 伊藤圭介校刻 安政五年 一冊 岡崎桂一郎氏
八紘通誌 賀作阮甫 嘉永四年 一冊 渡邊修二郎氏
坤輿圖識 賀作杏吾 弘化二年 六冊 吳秀三氏
同 附增補 同 三冊 遠藤又藏氏
七冊 吳秀三氏

同 補 賀作杏吾 弘化三年 四冊 遠藤又藏氏
同 同 弘化四年 二冊 岡崎桂一郎氏
萬國地學和解 宇田川榕精譯 慶應四年 一冊 渡邊修二郎氏
航海略 一冊 岡崎桂一郎氏
職方外記 艾儒略漢譯 一冊 本館
瀛寰志略 (清)徐繼畬文久元年 十冊 同
坤輿外記 南懷仁 桂川甫賽校本 一冊 岡崎桂一郎氏
世界國盡 綱澤驗吉譯 明治二年 六冊 本館
西洋事情 同 明治三年 十冊 同
條約十一箇國記 各國 同 一冊 同
萬國地名捷覽 所領 新井田敬藏 嘉永六年 一冊 渡邊修二郎氏
萬國地名箋 後藤梨春 明和二年 一冊 富士川游氏
紅毛談 二冊 渡邊修二郎氏
同 一冊 大槻文彥氏
紅毛雜話 寫本 一冊 本館
和蘭產物圖考 藤元貞 寬政十年 三冊 渡邊修二郎氏
和蘭通船 司馬江漢 文化二年 一冊 同
阿蘭陀土產 一冊 岡崎桂一郎氏
合衆國小誌 小關高產譯 安政二年 二冊 渡邊修二郎氏
佛蘭西國總記 大槻西磐譯 安政二年 一冊 同
咲咭唎紀略 荒木寶譯點 嘉永六年版 一冊 山中笑氏
伊祇利須記略提要 近藤守重輯 一冊 岡崎桂一郎氏
魯西亞志 桂川甫周譯 曲亭馬琴舊藏本 一冊 本館
同 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏

魯西亞國總記 大槻西磐譯 嘉永七年 一冊 富士川游氏
小人國考 嘉永年間活字版 一冊 山中笑氏
長崎虫眼鏡 江原某 元祿十七年 二冊 本館
長崎聞見錄 廣川獬 寬政十二年 五冊 同
長崎土產 磯野信春 弘化四年 一冊 同
野作雜記譯說 馬場貞由譯 勝海舟自寫 三冊 南葵文庫
蘭說辨惑 大槻茂質 寬政十一年 一冊 本館
萬國總界圖 石川俊之 寶永五年 一軸 渡邊修二郎氏
同 海上路程 三橋約客 天明三年 一帖 黑川眞道氏
世界之圖 渡邊修二郎氏
地球萬國全圖 馬久保赤水撰 天明五年 一帖 同
地球全圖 司馬江漢 寬政四年 二枚 林若吉氏
同 一枚 渡邊修二郎氏
雨半球圖 司馬江漢 二枚 吾妻健三郎氏
喝蘭新譯地球全圖 橋本宗吉 寬政八年 一枚 東京帝國大學圖書館
喝蘭新譯地球圖 橋本宗吉 寬政八年 一帖 岡崎桂一郎氏
喝蘭新譯地球全圖 橋本直政 天保十年 三冊 本館
圓球地海萬國全圖 石塚崔高 享和二年 一帖 渡邊修二郎氏
圓球萬國地海全圖 同 齊藤俊 一枚 白井光太郎氏
萬國全圖並日本邊界略圖 高橋景保 文化六年 一軸 大槻文彥氏
新訂 萬國全圖 高橋景保 文化七年 一帖 渡邊修二郎氏
新製輿地全圖 賀作杏吾 弘化元年 一卷 岡崎桂一郎氏
改正 萬國輿地全圖 白井通氣 嘉永三年 一帖 渡邊修二郎氏

國書刊行會

新訂地球萬國方圖 嘉永六年 一帖 同
地球萬國方圖 今藤勝吉藏板 嘉永七年 一帖 同
輿地航海圖 武田簡吾譯 安政五年 一帖 渡邊修二郎氏
新鐫萬國航海圖 武田簡吾譯 一帖 同
萬國輿地全圖 一帖 同
萬國地圖 一枚 朝倉龜三氏
銅版天地球之圖 西曆千七百七十四年 一軸 渡邊修二郎氏
萬國地圖 西曆千七百三十七年 一帖 吾妻健三郎氏
歐文萬國地圖 同 千八百三十五年 一軸 岡崎桂一郎氏
千六百九十年アムステルダム版亞細亞地圖 一枚 渡邊修二郎氏
世界古圖 十種 一軸 同
同 廿一點合裝 一軸 同
新譯和蘭國全圖 鷹見忠常 嘉永二年 一帖 渡邊修二郎氏
ばたびや城及市陌ノ圖 銅版 二枚 松浦伯爵家
三國通覽圖說 林子平 天明六年 六冊 本館
同 六冊 渡邊修二郎氏
日本輿地路程全圖 長久保赤水 寛政三年 一冊 本館
肥州長崎圖 長崎大昌文次右衛門板 一軸 岡崎桂一郎氏
長崎圖 長崎文錦堂版 享和二年 安永七年 一枚 東京帝國大學圖書館
長崎圖 同 一軸 岡崎桂一郎氏
長崎總圖 曲亭馬琴舊藏本 一冊 本館
長崎居留場全圖 慶應二年 一冊 同

御開港横濱大繪圖 橋本玉蘭齋 安政六年 一帖 渡邊修二郎氏
兵庫津之圖 文久年中 一冊 本館
伊能忠敬沿海地圖凡例 並書簡 一軸 市島謙吉氏
奉使日本紀行 青地林宗譯 寫本 一冊 富士川游氏
同 同 同 二冊 渡邊修二郎氏
蘭使日本紀行 坪井信良譯 寫本 十七冊 本館
日本行紀 開ヘイキ 寫本 一冊 渡邊修二郎氏
異人恐怖傳 志筑忠雄譯 三冊 本館
アンソン旅行記 千七百六十五年 一冊 松浦伯爵家
環海航路日記 廣瀨保慶 寫本 二冊 渡邊修二郎氏
涉濤日誌 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
歐西紀行 高島秋帆 慶應三年 二冊 富士川游氏
航西詩稿 北條煥 寫本 一冊 本館
滯英日記 野村文夫 寫本 一冊 野村百次郎氏
遊相日記 渡邊華山自筆日記 一冊 宮本仲氏
參海雜志 渡邊華山自筆日記 一冊 同
西游旅譚 司馬江漢 寛政六年 一冊 渡邊修二郎氏
長崎行役日記 長久保赤水 文化二年 一冊 渡邊修二郎氏
北槎聞略 桂川甫周 五冊 富士川游氏
同 同 八冊 富士川游氏
漂客紀聞 大槻玄澤 寫本 一冊 白井光太郎氏
俄羅斯耶國漂民口演 寫本
漂客談奇 吉田文治筆記 寫本 一冊 渡邊修二郎氏
大日本十佐國漁師漂流記 一冊 岡崎桂一郎氏
亞墨竹枝 井上默 弘化三年 一冊 同
沿海異聞 第十九册 渡邊華山自筆寫本 一冊 帝國圖書館

海外異聞 安政元年版 一名亞墨利加新話 一冊 渡邊修二郎氏
享保年間難波船漂流人口書寫 一冊 本館
環海異聞 大槻茂實 寫本 十六冊 同
漂民御覽記 寫本 一冊 同
外國紀聞 浦野元周 寫本 一冊 同
魯西亞新紀聞 寫本 一冊 同
魯西亞國漂流記 寫本 一冊 同
漂南新話 寫本 一冊 同
外國紀談 寫本 一冊 同
異國紀聞 寫本 一冊 同
薩州漂客見聞錄 寫本 二冊 同
異國漂蕩紀聞 寫本 一冊 同
漂客談話 寫本 一冊 同
漂流談 寫本 一冊 同
長瀨村利七漂流談 奥多昌忠 寫本 一冊 同
土佐漂客談奇 寫本 一冊 同

四 法制經濟 附貨幣

和蘭政典 神田孝平譯 明治元年 一冊 富士川游氏
和蘭律書 宇田川興齋 寫本 二冊 大槻文彥氏
經濟小學 神田孝平 慶應三年 一冊 本館
唐阿蘭陀持渡金銀錢圖鑑 寫本 二冊 本館
璧文泉備忘錄 行方滿洋自筆本 十冊 狩野亨吉氏
同補 三冊 同
西洋錢譜 朽木昌綱 天明七年 改 一冊 黑川眞道氏
西洋錢譜 朽木昌綱 正 一冊 渡邊修二郎氏
洋貨圖錄 松園主人編 一冊 本館

五 理學

泰西三才正蒙 永井青崖 嘉永三年 三冊 渡邊修二郎氏
泰西三才正蒙 永井青崖 嘉永三年 三冊 富士川游氏
圖會 永井青崖 嘉永三年 一冊 渡邊修二郎氏
關說三才鬼管 廣瀨信 文化五年
窮理外科則 新宮涼庭 嘉永三年 七冊 富士川游氏
理學提要 廣瀨元恭 嘉永七年 四冊 同
理學提要 廣瀨元恭 安政三年 四冊 渡邊修二郎氏
理學提要 廣瀨元恭 安政六年 一冊 岡崎桂一郎氏
阿關陀始制エレキテル究理原 橋本墨齋 寫本 二冊 大槻文彥氏
利搆人身窮理 廣瀨元恭 安政二年 一冊 岡崎桂一郎氏
博物新編 (英)合信 元治元年 一冊 渡邊修二郎氏
民間格致問答 士庭雪齋 元治二年 六冊 富士川游氏
理學初步 ハンエハン 寫本 一冊 同
理學初步 慶應三年 一冊 渡邊修二郎氏
理學原始 布施琿兒浦皇個 寫本 一六冊 東京帝國大學圖書館
玄眞新書 青地林宗 文政十年 一冊 岡崎桂一郎氏
氣海觀瀾 青地林宗 文政十年 一冊 渡邊修二郎氏
氣海觀瀾 青地林宗 文政十年 一冊 遠藤又藏氏
氣海觀瀾 青地林宗 天保九年 一冊 岡崎桂一郎氏
氣海觀瀾廣義 川本幸民 安政三年 五冊 本館

國書刊行會

鶏音機圖說	司馬江漢	一枚	林若吉氏
遠西奇器圖說	虞玉函 寫本（明）王徵譯繪	五冊	本館
舍密開宗	宇田川榕菴 天保八年	七冊	渡邊修二郎氏
舍密開宗	宇田川榕菴 天保八年	一七冊	本館
舍密開宗宇田川榕菴		二冊	岡崎桂一郎氏
舍密讀本	川本幸民 寫本	九冊	東京帝國大學圖書館
舍密局開講之說	三崎嶺輔 明治二年	一冊	本館
化學通	川本幸民 明治四年	二冊	同
らすべーる有機化學圖	一七七三年パリ版	一帖	吾妻健三郎氏
らすべーる有機化學圖	一八三八年パリ版	一帖	同
動物磁石	寫本	三冊	狩野亨吉氏
天經或問	游子六 享保十五年	四冊	本館
天經或問	四川正休 享保十五年	一冊	渡邊修二郎氏
天經或問註解	入江東岡 寛延三年	三冊	同
弧度往來	寫本	六冊	本館
司天摹諸器圖	寫本	二冊	同
丹霞叢書	宇田川榕菴寫本	一冊	富士川游氏
和蘭天說	司馬江漢 寛政八年	一冊	渡邊修二郎氏
和蘭天說	司馬江漢 寛政八年	一冊	本館
天球圖	司馬江漢 寛政八年	二枚	林若吉氏
天球圖	司馬江漢 寛政八年	二枚	東京帝國大學圖書館
地轉儀略圖解	司馬江漢 寛政年間	一枚	林若吉氏
地轉儀示蒙	司馬江漢 寛政年間	一冊	同
西洋新說地轉窮理論	松齋道人寫本 文政十年	一冊	渡邊修二郎氏
曆象新書	志筑忠雄 寫本	五冊	渡邊修二郎氏
曆象新書	中野柳圃 寫本	一冊	大槻文彥氏
西洋曆經	寫本	廿七冊	本館
譯入利亞曆考	高橋作左衛門景保自筆 寫本	一冊	狩野亨吉氏
咬嚕吧曆	安永九年	三冊	松浦伯爵家
天文平天儀圖解	經緯堂岩橋善兵衛 享和二年	一冊	渡邊修二郎氏
遠西觀象圖說	草野養準 文政六年	三冊	同
遠西觀象圖說	草野養準 文政六年	三冊	富士川游氏
遠西觀象圖說	草野養準	二冊	岡崎桂一郎氏
享中時辰儀示蒙	求己堂主人 安政四年	三冊合本	渡邊修二郎氏
天象話說	寫本	一冊	本館
林子平日晷計	柘本	一軸	岡崎桂一郎氏
世界大相圖釋存統	文政四年	一帳	渡邊修二郎氏
泰西水法	一名 窮理水法（明）李文蘭 寫本	二冊	本館
水質論	高野長英 寫本	一冊	岡崎桂一郎氏
雪華圖說	土井利位 天保三年	一冊	渡邊修二郎氏
泰西雷說	寫本	一冊	岡崎桂一郎氏
物類品隲	平賀源內 寛曆十三年	三冊	渡邊修二郎氏
物類品隲	平賀鳳溪	六冊	本館
六物新志	大槻茂質 天明六年	二冊	同
六物新志	大槻茂質 天明六年	二冊	岡崎桂一郎氏
一角纂考	木村謙齋 寛政七年	一冊	本館
駱駝考	寶山唐公愷 文政七年	一冊	渡邊修二郎氏
駱駝之說	山澤忠次郎 天保四年 寫本	一冊	岡崎桂一郎氏
駱駝	寫本	一冊	同
物印滿寫眞略	寫本 文政元年	一冊	白井光太郎氏
柿學啓原	宇田川榕菴 天保五年	一冊	富士川游氏
柿學啓原	宇田川榕菴	一冊	渡邊修二郎氏
植學啓原	宇田川榕菴	一冊	本館
泰西本草名疏	伊藤圭介 文政十二年	三冊	同
泰西本草名疏	伊藤圭介 文政十二年	一冊	渡邊修二郎氏
泰西本草名疏	伊藤圭介 寫本	三冊	岡崎桂一郎氏
トーニユス植物圖譜	和蘭ライデン版 千六百〇八年	一冊	白井光太郎氏
植物圖譜	馬場仲哲 寫本	三冊	野狩亨吉氏
曾占春先生筆沈香說幅	槃 寫本	一軸	岡崎桂一郎氏
幾何原本（泰西）利瑪竇		三冊	本館
筆算提要	伊藤憲藏 慶應三年	一冊	同

六　殖産工藝

甘藷之記	青木昆陽著 延享二年	一冊	渡邊修二郎氏
火浣布略說	平賀源內著 明和二年	一冊	富士川游氏
二物考	高野長英著 天保七年	一冊	渡邊修二郎氏
白牛酪考	桃井寅 寛政四年	一冊	渡邊修二郎氏
紅毛細工秘傳	蓮齋山人著	一冊	渡邊修二郎氏
機巧圖彙	細川半藏撰 寛政八年	一冊	同
同		一冊	同
創業起因錄	花井一好 寫本	一冊	岡崎桂一郎氏
平賀源內陶器工夫書上並地圖	平賀源內 寫本	一冊	同
更紗便覽	久須美孫左衛門 安永十年	二冊	黑川眞道氏
懸鍾時器襍記		一冊	渡邊修二郎氏
硝石製煉法	寧居士 文久三年 上卷	一冊	本館
彩職人部類書	天明四年再刻本	一冊	岡崎桂一郎氏
和蘭葡萄酒製法	寫本	一冊	本館
寫眞鏡圖說	柳河春三譯 初編 慶應三年	一冊	岡崎桂一郎氏
萬寶玉手箱	杉田成卿譯 初編 安政五年	一冊	渡邊修二郎氏
同		一冊	同
萬寶新書	宇田川興齋譯 初二篇 安政七年	一冊	本館
秘事新書	點林堂主人 慶應四年	二冊	渡邊修二郎氏
ワアテルスポイトの引札	井手氏細工	一冊	本館
改正紋所帳	紋大輔 文政天保頃	一枚	同
羅馬字入錫		一冊	渡邊修二郎氏
和蘭古渡布裂		三箇	同
和蘭古渡更紗		一枚	志賀重昂氏
ぎやまん文鎮	島津齊彬ノ製造セシメタルモノ	二枚	同
敷瓦		一個	同

七　醫學

和蘭醫話	琴坂先生 文化二年	二冊	本館
蘭籍摘芳	大槻磐水譯 文化十四年	三冊	渡邊修二郎氏

國書刊行會

扶氏經驗遺訓 緒方洪庵譯 安政四年 二冊 岡崎桂一郎氏
扶氏經驗遺訓益藥方編 同 同 十九冊 富士川 游氏
扶氏遺訓割記 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
居家備用 高野長英譯 寫本 十五冊 林 縫之助氏
藥治迴源 川本三省譯 寫本 二冊 東帝國大學圖書館
醫則 坪井信良譯 寫本 二冊 京都岡崎桂一郎氏
抱關錄 寫本 一冊 同
摸斯篤翻譯 寫本 一冊 同
和蘭醫事問答 問清庵、答之白 寛政七年 二冊 富士川 游氏
西洋醫事集成寶函 桂木宗吉 文政四年 一冊 同
遠西醫方名物考並補遺 宇山川榛齋譯、榊庵補 天保五年 四十五冊 同
醫療正始附醫院類案 伊東玄朴重譯 天保八年 九冊 同
泰西名醫彙講 賀作既甫 天保八年 五冊 同
講數餘錄 木佛歎 寫本 一冊 同
知生論 廣瀬天目或、長瀬元藏記、安政三年 二冊 同
醫學小補 帆足萬里 寫本 一冊 同
蘭文醫書 一八三八年 一冊 林 若吉氏
全體新論 英、合信氏著 安政四年 二冊 本 館
抱氏人身窮理學小解 緒方洪庵譯 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
人身究理學小解 緒方洪庵譯 寫本 二冊 富士川 游氏
生理發蒙並圖式 島村鼎譯 慶應二年 九冊 同
病因精義 小森玄真 文政十年 九冊 同
病學通論 緒方洪庵譯 嘉永二年 三冊 本 館
公氏病學淵源病證論 皇玉順藏譯 一冊 野村百次郎氏
モスト醫學詳府病名目錄 野村文夫手抄 安政五年 一冊 岡崎桂一郎氏
發泡打膿考 武部于藝 文化十五年 三冊 富士川 游氏
察病龜鑑 青木清齋譯 安政四年 二冊 岡崎桂一郎氏
同 青木清齋譯 安政四年 一冊 本 館
脈論 津田淳三 安政五年 一冊 富士川 游氏
同 同 五冊 同
濟衆錄 寫本 一冊 同
施藥院解男體臟圖 寫本 五冊 遠藤又藏氏
解體新書 杉田玄白譯 安永三年 二冊 朝倉龜三氏
同 同 十冊 富士川 游氏
重訂解體新書 杉田玄白譯、大槻磐水訂 安政五年 一帖 岡崎桂一郎氏
同 編成全圖 杉田玄白新譯、大槻磐水訂、天保十四年 一冊 同
解體瑣言 杉田玄白譯 寛政十一年 一冊 富士川 游氏
和蘭醫範提綱 內景 宇田川榛齋譯 文化二年 三冊 遠藤又藏氏
同 同 弘化二年 一帖 同
醫範提綱內景銅版圖 宇田川榛齋 文化五年 一帖 朝倉龜三氏
同 同 同 一冊 岡崎桂一郎氏
解體發蒙 三谷笙洲 文化十年 二冊 富士川 游氏
解體絨要 加古良玄 文政二年 一冊 岡崎桂一郎氏
同 同 一冊 同
解臟圖賦 池田義之 文政五年 二卷 伊達伯爵家
解剖存眞圖 寫本 一帖 吾妻健三郎氏
ふらんちん解剖圖 佛國石版 一八〇三年

醫法內用藥能論 高貫齋 天保七年 一冊 渡邊修二郎氏
泰西藥名早引 橫井璀 天保八年 二冊 岡崎桂一郎氏
窓篤兒藥性論 林洞海譯 安政三年 二冊 本 館
同 同 二冊 岡崎桂一郎氏
阿蘭陀本草和解 野呂元丈 寫本 延享二年 二冊 白井光太郎氏
阿蘭陀本草圖經 鳴月齋七 寫本 一冊 同
泥蘭度草木略 宇田川榛齋譯 寫本 三冊 同
ドゥニエス植物圖譜譯本 寫本 二冊 同
七新藥 司馬凌海 文久二年 二冊 岡崎桂一郎氏
同 同 同 三冊 富士川 游氏
同 同 同 三冊 本 館
紅毛流油膏書 吉雄永純譯 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
阿蘭陀製油秘方 寫本 一冊 同
家方秘笈仙鼎方 桂川國訓 寫本 三冊 本 館
醫圖定橘嶠山堂膏則 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
泰西方鑑 小森桃塢譯 天保三年 一冊 同
同 同 三冊 同
西醫今日方 薩林普山 嘉永元年 二冊 同
濟生三方 杉田成卿譯 嘉永二年 三冊 本 館
遠西方彙 伊東玄伯譯 文久元年 四冊 同
同 伊東貫齋譯 文久二中 三十冊 同
掌中西醫日用方 中川淡齋 元治元年 二冊 岡崎桂一郎氏
和蘭經驗方 寫本 一冊 同
釉珍內外方叢 伊東南洋 寫本 一冊 同
和蘭醫內科撰要 宇田川玄隨譯 文化七年 拾六冊 富士川 游氏
泰西熱病論 吉田成德譯 文化十一年 六冊 同
泰西疫論 新宮涼庭譯 文政七年跋 二冊 岡崎桂一郎氏
避疫要法 高野長英 天保七年 一冊 同
虎狼痢治準 緒方洪庵譯、共菴譯述 安政四年 一冊 同
喘息篇 大槻俊齋 寫本 二冊 同
內科書 佐藤舜海譯 寫本 二冊 本 館
內科各論 (閑)抱度印口授 寫本 一冊 岡崎桂一郎氏
引痘新法全書 小山蓬洲著 弘化四年 一冊 本 館
引痘要略解 桑田和 嘉永二年 一冊 同
牛痘發蒙 桑田和 嘉永二年 一冊 富士川 游氏
牛痘發蒙 桑田和 嘉永二年 一冊 岡崎桂一郎氏
牛痘發蒙 桑田和 嘉永二年 一冊 同
牛痘解蔽 西村春雄 嘉永五年 一冊 富士川 游氏
牛痘解蔽 木活字本 嘉永五年 一冊 岡崎桂一郎氏
除痘約論 柳河春三譯 安政五年 一冊 同
牛痘種法篇 伊藤玄朴譯 一冊 同
牛痘新書 有馬攝藏譯 一冊 富士川 游氏
蝦夷人種痘之圖 國貞畫 嘉永二年 一枚 本 館
痘瘡唇舌圖 一折 岡崎桂一郎氏
穆氏格列羅說 寫本 一冊 本 館
安政簡勞痢記 安政五年九月 一冊 同
金瘡跌撲療治之書 西玄哲 寫本 一冊 富士川 游氏
外科訓蒙圖彙 明和六年三月 二冊 富士川 游氏
外科訓蒙圖彙 伊良子光顯 明和六年 一冊 渡邊修二郎氏

外科訓蒙圖會 上卷 伊良子光顯譯定 一冊 本館
整骨新書 各務文獻著 文化七年 三冊 富士川 游氏
整骨新書 各務文獻著 文化七年 三冊 岡崎桂一郎氏
折肱要訣加古眞玄 文化七年 五冊 富士川 游氏
黴瘡新書 杉田立卿譯述 文政四年 三冊 同
瘍科秘錄 本間玄調 安政六年 七冊 富士川 游氏
瘍醫新書 大槻磐水譯 四冊 同
銃創瑣言 大槻俊齋 嘉永七年 一冊 岡崎桂一郎氏
瘍科秘錄 本間棗軒(玄調)「正」弘化四年仲冬「補」安政六年三月 拾七冊 本館
和蘭外科全書附錄 鹽田良平著 一冊 同
阿蘭陀外科全書河口良菴著 二冊 岡崎桂一郎氏
蘭方外傷圖卷 一卷 同
繃縛圖式 大槻玄幹 一冊 同
阿蘭陀南蠻流行疔腫見分秘書 一冊 本館
導漩私錄 小出龍著 天保九年(序) 三冊 富士川 游氏
產科探頷圖訣並圖式 水原義博 天保八年 三冊 同
醇生菴產育全書 水原義博 嘉永三年 七冊 同
小兒諸病鑒法治法全書 十五冊 同
宇田川玄眞譯
幼幼精義 卷一、四、 堀內素堂譯 弘化二年 二冊 岡崎桂一郎氏
幼幼精義 堀內忠龍重譯 一冊 富士川 游氏
幼幼精義 堀內素堂重譯 嘉永元年序版 二冊 本館
愛育總說 桑田和著 嘉永六年 一冊 岡崎桂一郎氏
婦嬰新說 菅茂材撰 安政己未 二冊 本館

治腎新法秘策 青池林宗譯 二冊 富士川 游氏
眼科新書 卷一、五、附錄 杉田立卿譯 文化十三年 三冊 岡崎桂一郎氏
和蘭眼科新書 杉田立卿譯 並附錄 文化十三年 五冊 富士川 游氏
眼科錦囊 本庄普一著 天保二年 二冊 岡崎桂一郎氏
同 四冊 本館
續眼科錦囊 本庄普一 天保八年 二冊 同
眼科摘要 倉次元意譯 明治二年 二冊 岡崎桂一郎氏
勃乙斯眼目譯說 第八卷 寫本 一冊 本館
眼球聚說
白內腎治術集論 附穿瞳術集論 寫本
(ヒヨハンネモノールト)
白內腎方術論 緒方洪庵譯 寫本 一冊 富士川 游氏
眼療則 松本良順筆記 寫本 一冊 同
驗溫管略說 高野長英著 寫本 一冊 伊達伯爵家
傷寒外傳 宮川春暉 三冊 本館
養生七不可 小詩德堂著 享和元年頃 一冊 富士川 游氏
養生法 松本良順譯 山內豐城補 一冊 同
順正書院記並詩 新宮貞亮 明治二年 一冊 同
ウルユス弘方心得書 一冊 岡崎桂一郎氏
反故堆 同 一冊 同

八 兵事

精校海國兵談 林子平 嘉永四年 十冊 遠藤 又藏氏
同 同 十冊 本館

海上砲術全書 宇田川榕庵等譯 寫本 三十冊 富士川 游氏
海岸備要 本木正榮譯 嘉永五年 三冊 岡崎桂一郎氏
和蘭步操軌範全圖 官軍下贈 鍋信敦 安政二年 一帖 同
三兵答古知幾 高野長英譯 安政三年 寫本 二冊 大槻 文彥氏
同 同 寫本 二冊 渡邊修二郎氏
三兵活法 鈴木春山譯 安政四年 寫本 三冊 同
同 同 寫本 三冊 大槻 文彥氏
三兵養生論 久我俊齋譯 慶應三年 二冊 本館
大礮使用軌範 寺地強平譯 安政四年 三冊 岡崎桂一郎氏
砲科新論 大鳥圭介譯 文久元年 七冊 赤松 範一氏
築城典型 大鳥圭介譯 萬延元年 二冊 大槻 文彥氏
野戰兵囊前編 津藩藩譯 慶應三年 五冊 朝倉 龜三氏
海策雜綴 勝海舟自筆 一冊 南 葵 文庫
阿蘭陀軍艦銃砲圖 寫本 一卷 同
稻富一夢砲術印可皆傳書 廿七冊 木村 彖市氏
礮卦 佐久間象山自筆稿本 一冊 宮本 仲氏
乾行艦の木片 一箇 志賀 重昂氏
遠西武器圖略 一冊 岡崎桂一郎氏
同 市川齋宮譯 同 嘉永六年 一冊 渡邊修二郎氏
和蘭官軍之服色及軍裝略圖 山脇正民譯 安政五年 一冊 南 葵 文庫

北齋漫畫 文化十四年 一冊 渡邊修二郎氏
國朝砲熕權輿錄 岡友若拙 安政二年 一冊 同
和蘭礮具圖說 結城頓斉譯 安政元年 一帖 岡崎桂一郎氏
熕礮用法 杉田信譯 弘化四年 三冊 南 葵 文庫
鐵熕鑄鑑圖 金森錦蘆譯 安政三年 一帖 岡崎桂一郎氏
江川垣斉鑄砲の時の鐵屑 一箇 志賀 重昂氏
韮山反射爐煉瓦片 一箇 本館
西洋軍用馬術叢說 寫本 三冊 同
徂徠兵法不審條々の跋文 一軸 南 葵 文庫
存華挫狄論 佐藤信淵 寫本 二冊 本館
海防彙議並補 樋田順庵 寫本 二十五冊 同
履霜錄 河野逸 慶應元年 四冊 同

九 書畫

小野蘭山詩 一軸 岡崎桂一郎氏
杉田玄白書 一軸 同
同 一軸 吳 秀三氏
桂川月池詩 一軸 岡崎桂一郎氏
森島中良狂歌 一軸 同
高島秋帆書 一軸 富士川 游氏
宇田川榕齋書 一軸 岡崎桂一郎氏
小石元瑞七絕 一軸 吳 秀三氏
坪井誠軒詩 一軸 岡崎桂一郎氏
堀內素堂詩草 一軸 同
大槻磐溪洋製軍艦詩 一軸 同
石川櫻所詩 一軸 同
江馬天江詩 一軸 同
柘植蟾洲公七絕 一軸 渡邊修二郎氏

國書刊行會

菊宮涼庭書帖　一帖　岡崎桂一郎氏
渡邊華山墓誌　二軸　市島　謙吉氏
字圖高野長英書　一枚　渡邊修二郎氏
幸太夫露文雜記　幸太夫自筆一冊　林　若吉氏
洋學家書簡　數通　市島　謙吉氏

新井白石　小石元瑞　木村黄山　浅墨　伊能忠敬　大川茂樹　古川松軒　三浦梅園　桂川月池　高島秋帆　大槻磐水　伊藤圭介　清川八郎

蘭學家書簡　二卷　大槻　文彦氏

青木昆陽　木村蒹葭堂　柱川甫周　大槻玄澤　宇田川榕庵　野呂元丈　馬場佐十郎　桂川甫賢　宇田川玄隨　杉田玄白　大槻玄幹　宇田川玄真　小野蘭山　吉雄俊碩　大槻磐三　足立長安　戸塚亮齋

蘭學名家手簡　一軸　岡崎桂一郎氏
蘭學名家手簡　一軸　吳　秀三氏
蘭醫尺牘　一軸　岡崎桂一郎氏
蘭醫尺牘　一軸　同
伊東玄朴、山本亡羊尺牘幅　一軸　同
林洞海先生詠草尺牘幅　一軸　同
坪井信道尺牘　一軸　同
新井白石尺牘　一軸　同
佐久間象山書翰數通　一卷　岡崎桂一郎氏
長崎九月廿三日出大槻民治玄幹等より來狀寫並中山播津守書狀　一卷　岡崎桂一郎氏
伊達政宗文書　細川忠興文書類面入　二枚　渡邊修二郎氏
西洋書談　一冊　林　若吉氏
司馬江漢著寛政十一年版

油繪古畫　一軸　渡邊修二郎氏
阿部正精筆歐式景色畫並ニ蘭文及ビ漢譯　二枚　同
殿島社納額　泰西風景畫寫眞　一枚　同
殿島社納額　油繪風泰西風景畫寫眞
華螺亭浮舟新見象筆　一枚　同
和蘭軍出陣圖　薩澤梅南洋畫　一軸　大槻　文彦氏
ボムペ氏建立長崎病院圖　一面　渡邊修二郎氏
日本銅版全集　一帖　吾妻健三郎氏
玄々堂銅板畫帖　一帖　本　館
螢岡牧場圖　亞歐堂田善筆　一軸　吾妻健三郎氏
銅板畫額面　一面　渡邊修二郎氏
銅板圖　和蘭製　八枚　松浦伯爵家
和蘭銅板日本畫並古地圖　慶安三年　一軸　大槻　文彦氏
和蘭銅板玉盤塗額面　一面　高木　順氏
和蘭風景額面　同　同
チヤパンボンチ　一冊　狩野　亨吉氏
和蘭國ライデン門圖　司馬江漢畫　一軸　黑川　真道氏
帝玉圖　傳云　山田四方作筆油繪　二軸　吾妻健三郎氏
西洋人物圖　司馬江漢筆油繪　二軸　同
西洋人物郊外散歩圖　傳云　司馬江漢筆油繪　一軸　同
司馬江漢筆獅子並大槻磐水賛　一輔　岡崎桂一郎氏
天海盤圖　司馬江漢寫生　一枚　吾妻健三郎氏
前野蘭化先生晩年畫　一軸　富士川　游氏
高島秋帆自賛虎畫　一軸　市島　謙吉氏
桂川甫周柳營圖　一軸　吳　秀三氏
高野長英詩書　一軸　岡崎桂一郎氏

江川坦菴山水小品　一軸　市島　謙吉氏
江川坦菴戲畫　一軸　狩野　亨吉氏
岩瀨鷗所筆湖山煙雨圖　一軸　渡邊修二郎氏
新宮涼庭筆山水圖　一軸　吳　秀三氏
白井赤水筆洋人會食圖　一軸　岡崎桂一郎氏
阿蘭陀船圖說　林子平出版　寛政二年　一軸　大槻　文彦氏
和蘭船圖　魯西亞船ノ圖　白川樂翁識　一軸　白井光太郎氏
烈公寶船摺本　文政十二年　一軸　市島　謙吉氏
葡萄人來朝圖屏風　半双　林　若吉氏
文政五年英吉利船浦賀渡來圖畫
安政元年亞米利加人横濱渡來圖畫　一軸　渡邊修二郎氏
安政元年米國艦隊横濱入港實況圖　一軸　同
安政元年三月彼理提督一行饗應圖　一軸　岡崎桂一郎氏
同　一軸　渡邊修二郎氏
嘉永六年露國使節「プーチヤチン」長崎渡來圖畫　二軸　同
亞米利加人浦賀渡來圖畫　一軸　同
嘉永六年米國使節久里濱上陸圖畫
弘化三年米國軍艦浦賀渡來圖畫　一軸　同
嘉永癸丑相州浦賀北亞墨利加人渡來圖　一軸　本　館
米艦渡來幕府出兵圖　安政版　一軸　和久　正辰氏
久里濱へ上陸之圖　一卷　岡崎桂一郎氏
ペルリ渡來繪紙　一帖　同

ナタムス肖像
ヨロシヤ人物圖文化元年
阿蘭陀女人圖文化十四年
ペルリ像　四枚　朝倉　龜三氏
長崎港阿蘭陀船碇泊圖　一卷　南　葵　文庫
天正四年來朝唐人圖　近江國安土板　一枚　狩野　亨吉氏
我寶節用　一冊　渡邊修二郎氏
長崎版五國人物繪　一枚　同
和蘭人男女人物圖　二軸　同
藍摺西洋人物圖　川芳画安政頃版　一軸　和久　正辰氏
異國人物圖　横濱田港初期發行錦繪　一軸　渡邊修二郎氏
開港初期發行俗畫集覽　二軸　同
繪紙類　一冊　市島　謙吉氏
續海防彙議畫畫　驛田泰　一冊　渡邊修二郎氏
芝蘭堂新元會圖　蘭學者詳案合作　一枚　本　館
萬國旗章圖譜　鳴雷時嘉永五年　一冊　渡邊修二郎氏
西洋標旗　寫本　一冊　岡崎桂一郎氏
支倉常長肖像　小額面入　一面　渡邊修二郎氏
岩瀨肥後守忠震畫像　一枚　同
伊能忠敬　一幅　狩野　亨吉氏
橋本宗吉先生畫像　一軸　富士川　游氏
堀内素堂先生畫像　一軸　同
大槻磐水先生畫像　堀田左京亮正衡筆　一軸　大槻　文彦氏
大槻磐水先生畫像　一軸　富士川　游氏
大槻磐溪先生畫像　松平確堂筆　一軸　大槻　文彦氏
大槻俊齋先生畫像　一軸　富士川　游氏
河津省庵先生畫像　一軸　同
片山國僕圓然先生畫像　杉田玄白遠藤吉雄耕牛先生畫像　一軸　狩野　亨吉氏
大槻　文彦氏

國書刊行會

吉雄耕牛先生畫像　一軸　富士川游氏
鷹見爽鳩先生畫像（渡邊華山筆）　一軸　高木順氏
高野長英先生畫像（伊達宗城贊）　一軸　大槻文彦氏
宇田川槐園先生畫像　一軸　富士川游氏
海上隨鷗（前村三伯）先生畫像　一軸　大槻文彦氏
野村文夫肯像（油繪額）　一面　野村百次郎氏
桑田立齋先生畫像　一軸　富士川游氏
前野蘭化先生畫自賛畫像　一枚　大槻文彦氏
小石元俊先生畫像　一軸　富士川游氏
小石元瑞先生畫像　一軸　同
新井白石畫像（草川重道畫）　一軸　岡崎桂一郎氏
新井白石畫像　一軸　本館
佐藤泰然先生畫像　一軸　富士川游氏
木村蕤園堂畫像（文雲畫、建孟筠歌、椿山書）　一軸　市島謙吉氏
箕作阮甫先生畫像　一軸　富士川游氏
新宮碩通先生畫像　一軸　同
平賀源内油繪肯像（中丸精畫）　一面　大槻文彦氏
杉田玄白先生畫像　一軸　大槻文彦氏
杉田玄白先生畫像　一軸　富士川游氏
杉田玄白肯像　一軸　吳秀三氏
杉田梅里先生畫像　一軸　富士川游氏
西勃兒篤先生畫像　一軸　同
シーボルト肯像（岩崎灌園筆）　一軸　白井光太郎氏
蘭醫ヘーステル畫像　一軸　大槻文彦氏
維理斯先生畫像　一軸　富士川游氏
繆兒刈兒先生畫像　一軸　同
和蘭陀海軍第一回教師（ペルスリユケン肯像）　一面　南葵文庫
和蘭陀海軍第二回教師　一面　同

一〇　雜

野叟獨語　杉田玄白　一冊　岡崎桂一郎氏
萬國渡海年代記（華津外史）　安政頃出版　一冊　渡邊修二郎氏
伊達歐南遣使考（政宗）　一冊　同
外蕃通書（平井希昌）　明治九年　一冊　本館
外蕃通略（近藤守重）　寫本　一冊　渡邊修二郎氏
魯接問答（吉田松陰）　安政四年　三冊　本館
異人渡來日記　寫本　一冊　同
亞美理駕合衆國書翰　一冊　同
合衆國伯理璽天德（プレシデント）書翰和解　一冊　岡崎桂一郎氏
新製樂草紙　一帖　同
五國條約（並稅則）　安政六年　五冊　本館
安政二年日米條約の署名寫眞版　一枚　渡邊修二郎氏
新定枕（算法）　慶應二年　一冊　同
海路安心錄（阪部廣胖撰）　文化十三年　一冊　同
航海金針　（來國瑪高溫）　安政四　一冊　同
航海金針俗解（春洋漁人譯）　安政五年　一冊　岡崎桂一郎氏
俄羅斯紀聞（古賀侗庵抄記）　寫本　四冊　本館
長崎港草（館野正紹編）　明治廿八年版　四冊　渡邊修二郎氏
ヤユビユス之像（カツテンデルキ肯像）　一枚　松浦伯爵家
寫眞帖　一冊　林若吉氏

國書刊行會

横濱繁昌記　柳河春三撰　文久元年　一冊　同
横濱開港見聞誌　橋本玉蘭編　文久二年　四冊　同
珍事横濱噺　松伯　文久二年　一冊　本館
珍事横濱はなし　松伯　文久二年　一冊　渡邊修二郎氏
蔦錄　大槻玄澤　文化六年　三冊　同
目さまし草　大槻玄澤門人撰　文久十二年　一冊　同
夢遊漫筆　村山昌水　寫本　一冊　狩野亨吉氏
大阪北組惣年寄町民宗門其他に關する證文（寫本）　文政七年　一折　渡邊修二郎氏
正寫異人圖畫　川芳貞　文久元年　一冊　岡崎桂一郎氏
粘込帖　一冊　富士川游氏
司馬江漢書畫會案内札　文化年　一枚　林若吉氏
因證辨　寺門靜軒　寫本　一冊　岡崎桂一郎氏
毀蘭說　紫蘭駐（無徹法師）　寄轉療法　狂畫堂筆　一冊　同
鑄人書（閑生家ノ藏）　小關三英自筆　一冊　同
渡邊華山原稿殘片　寫本　一枚　志賀重昂氏
草廬雜誌抄　青木昆陽自筆　一枚　吳秀三氏
菊莖瑣言　野村文夫　寫本　一枚　市島謙吉氏
噶蘭演戲記　鑒溪　寫本　一冊　吳秀三氏
噶蘭演戲記　一冊　野村百次郎氏
海舟先生自筆　寫本　一冊　岡崎桂一郎氏
官板　バタビヤ新聞　一冊　南葵文庫
官板　バタビヤ新聞（香書調所譯）　文久二年　一冊　同
官板　バタヒヤ新聞（津書調所）　文久二年　五冊　朝倉龜三氏
官板　バタビヤ新聞　二冊　渡邊修二郎

官板　海外新聞（洋書調所）　文久二年　二冊　同
官板　海外新聞別集（洋書調所）　文久二年　一冊　同
官板　海外新聞別集（洋書調所）　文久二年　二冊　朝倉龜三氏
官板　海外新聞別集（萬屋兵四郎板）　文久二年　二冊　本館
官板　六合叢談　文久年間版　合本壹册　渡邊修二郎氏
官板　中外新報　文久年間版　五冊　朝倉龜三氏
官板　香港新聞　文久年間版　一冊　本館
西洋雜誌（柳河春三）　自慶應三年至明治二年　一冊　渡邊修二郎氏
異國船渡來風說書　一冊　本館

一一　洋書

歷史、傳記、地理、紀行、

Alcock, Sir R.—The Capital of the Tycoon. Lond., 1863. 二冊　渡邊修二郎氏出品
Amati u. Hendschel—Die Japonesesche Ambasciatoren in Rom u. Hispania. 1615. Ingolstadt, 1617.　同　上
Bruyn, Cornelis de.—Reizen.（寫幕楓山本）　二冊　Amst. 1714.　東京帝國大學圖書館出品
Cannabich, J. G. F.—Lerboek der Aardrijkskunde. Deel 5. Amst. 1845.　帝國圖書館出品
Dalton, W.—Will. Adams: the First Englishmen in Japan（山浦按針ウリヤム・アダムス傳）　渡邊修二郎氏出品

國書刊行會

Doeff, H.—Herinneringen uit Japan. Harrle. 1833.
帝國圖書館出品

Golownin, W. — Mijne Lotgevallen in mijne Gevangenschap bij de Japaners. Dord., 1817. (帝國圖書館)
東京帝國大學圖書館出品

Gualtieri.—Ambasciatori Giaponesi.
渡邊修二郎氏出品

Heerdervoort, J. L. C. Pompe v.—Vijf Jaren in Japan. Deel 2. Leiden, 1868.
同 上

Heine, W.—Die Expedition in die Seen von China, Japan, und Ochotsk. Leipzig, 1858.
同 上

Kaempfer, E.—The History of Japan. Lond. 1728. 二冊
同 上

Kaempfer, E.—Beschryving van Japan. Amst. 1733 (帝國圖書館)
東京帝國大學圖書館出品

Montanus, A.—Remarkable Addresses by Way of Embassy from the East-India Company to the Emperor of Japan. Lond., 1670.
渡邊修二郎氏出品

Montanus, A.—Gedenkwaerdige Gesantschappen der Oost—Indische Maetschappy in't Vereenigde Nederland aen de Kaisaren van Japan. Amst. 1669. (帝國圖書館)
東京帝國大學圖書館出品

Nachod, O.—Japan. Tokyo. 1900.
渡邊修二郎氏出品

Perry, Commodore M. C: — Narrative of the Expedition of an American Squadron to the China Seas and Japan. Wash., 1856.
同 上

Valentyn, F,—Beschryving. Amst. 1724-26. 五冊 (帝國圖書館)
東京帝國大學圖書館出品

醫書

Cohen, I. A.—Nieuw Statistisch-Geneeskundig Jaarbaek voor het Koningrijk der Nederlanden.—1850.
岡崎桂一郎氏出品

Consbruch, G. W.—Geneeskundig Handboek voor Praktische Artsen. Amst. 1827. 二冊
同 上

Epen, G. J. van.—Beknopte Handleiding tot de Leer der Verbanden. Amst. 1829. (川本氏)
東京帝國大學圖書館出品

Heister, L.—Heelkundige Onderwyzingen. Amst., 1755. 二冊 (江馬氏)
同 上

Hufeland, C. W.—Handleiding tot de Geneeskundige Praktijk Erfmaking van een vijftigjaarige Ondervinding.
日本醫學會(柴田氏)
同 上

Müller, H.—De Paardendocter, voor den Burger en Landman. Groningen, 1841. (柴田氏)
同 上

Plenk, J. J.—Heelkundige Artzeny-Winkel of Chirurgyns Apotheek. Utrecht, 1798. (川本氏)
同 上

Richerand, A.—Nieuw Grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch. Amst. 1826. (柴田氏)
同 上

Richerand, A.—Nieuw Grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch. Amst. 1826. (三宅氏)
同 上

Richerand, A.—Nieuw Grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch. Amst., 1821. 二冊 (江馬氏)
東京帝國大學圖書館出品

Richerand, A.—Nieuw Grondbeginselen der Natuurkunde van den Mensch. Amst., 1826.
坪井正五郎氏出品

Roose, T. G. A.—Handboek der Natuurkunde van den Mensch. Amst., 1809. (川本氏)
東京帝國大學圖書館出品

Roose, T. G. A.— Handboek. der Natuurkunde van den Mensch.
日本醫學會(川本氏)
同 上

Sandifort.—Handleiding tot de Geneezing der Inwendige Ziekten. 日本藥本三冊 (川本氏)
同 上

Valentin, G.—Natuurkunde van den Mensch. Gouda, 1845. (柴田氏)
同 上

Woyt, J. J.—Gazophylacium Medico-Physicum, of Schat-Kamer. Amst., 1741. (江馬氏)
同 上

文學、美術、宗教

Cremer, J. J.:—I. "Portretten" II "Kees Springer in en Buiten de Kerk." Leyden, 1361. (川本氏)
東京帝國大學圖書館出品

Gratama, K. W.:—Schetsen uit Pastorij te Mastland. Schoonhoven, 1863. (三宅氏)
同 上

Medina, J. T.:—Nota Bibliografica. Sevilla, 1894.
渡邊修二郎氏出品

Satow, E. M.:—The Jesuit Mission Press in Japan. 1888.
同 上

Wieland, P.:—Nederduitsche Spraak Kunst. Amst., 1805. (日本醫學會) 參冊
東京帝國大學圖書館出品

兵書、航海書

Fossé, M.:—Verklaarde, Vragen voor Jonge Officieren. Amst., 1833. (三宅氏)
東京帝國大學圖書館出品

Nieuwland, P.:—Zeevaart-Kunde. Amst., 1793. (帝國圖書館)
帝國圖書館出品

Rees, W. A, van.:—Handboek voor Postkommandaten op Java en Buitenbezittingen. Arnhem, 1862. (川本氏)
東京帝國大學圖書館出品

物理化學、天文、動植物

Berzelius, J. J.:—Leerboek der Scheikunde Rotterd, 1834-42. 六冊 (川本氏)
東京帝國大學圖書館出品

Berzelius, J. J.:—Traité de Chimie Bruxelles, 1839. 二冊
帝國圖書館出品

Dodonaeus, R.:—Cruydt-Boeck. Leyden, 1608. (武藤氏)
東京帝國大學圖書館出品

Dodonaeus, E.:—Cruydt-Boek Remberti Dodonaei. Antwerpen, 1644. (江馬氏)
同 上

Goedaert, J.:—Metamorphosis Naturalis. Deel II. Middelburgh.
（杉田本）　同　上
Henry, W.:—Systematisch Handboek der Werkdadige Scheikunde. Amst., 1808.
貳冊　岡崎桂一郎氏出品
Isfording, J. N.:—Natuurkundig Handboek voor Leerlingen. Amst., 1826.
渡邊修二郎氏出品
Kastelijn, P. S.:—Natuurkundige Chemie. Amst., 1794.
（杉田本）（佐久間象山藏印アリ）
東京帝國大學圖書館出品
Kwantes, J.:—Aanleiding tot de Wiskundige Aardrijksbeschrijving. Amst., 1835.
（川本本）　同　上
Jouston, L.:—Beschrijving van de Natuur der Viervoetige Dieren. Amst., 1661.
（蒔蕃楓二本）　同　上
Album der Natuur. Groningen, 1858.
（川本本）　同　上
Handleiding tot de Kennis der Natuur. Leyden, 1854.

辭書

渡邊修二郎氏出品

Bomhoff, D.:—Duitsch-Hollandisches und Hollandisch-Deutsches Taschen Wörterbuch Leyden.
（杉田本）　東京帝國大學圖書館出品
Dannenfelser, W. F.:—Nieuw Zakwoordenboek der Hollandische en Franische Talen. Utrecht.
（杉田本）　同　上
Doef, H.:—Inleiding tot het woordenboek.
二冊
（日本寫本，文化十三年）（江馬本）　同　上
Doef, H.:—Inleiding tot het woordenboek.
（坪井信道先生手寫本）　坪井正五郎氏出品
Hamel, S.:—Nieuw Woordboek der Nederlantsche en Latynsche Tale. Dordrecht, 1719.
岡崎桂一郎氏出品
Holtrop, J.:—Nederduitsch en Engelsch Woordenboek. Dordrecht, 1824.
（蕃書調所本）　帝國圖書館出品
Kramers, J.:—Geographisch Woordenboek den Geheele Aarde. Gouda, 1855.
（川本本）　東京帝國大學圖書館出品
Lauscins, A. G.:—Het Algemeen historisch, Geographisch en Genealogisch Woordenboek. Gravenhage, 1724-34.　四冊
（蒔蕃楓山本）　同　上
Marin, P.:—Groot Nederduitsch en Fransch Woeden-Boek. Amst., 1768-82.
（江馬本）　同　上
Medhurst, W. H.:—An English and Japanese Vocabulary, Batavia, 1830.
（ズベルヤ版）　渡邊修二郎氏出品
Medhurst, W. H.:—An English and Japanese Vocabulary Batavia, 1830.
（ズベルヤ版）　帝國圖書館出品
Meijers, L.:—Woordenschat, I "Bastaardtwoorden," II "Koustwoorden," III "Verouderde woorden."　參冊
（川本本）　東京帝國大學圖書館出品

追加

Dodonaeus, R.:—Cruydt-Boeck. Leyden, 1608.
白井光太郎氏出品
Siebold, Ph. Fr. v.:—Nippon: Archiv zur Beschreibung von Japan. Würzburg, 1897.
二冊　同　上
Thumberg, C. P.:—Travels, vol. IV. Travels in the Empire of Japan, etc. London, 1796.
渡邊修二郎氏出品

國書刊行會

○展覽會　明治の時代列ねられし日本
記ミ二往きすをたづねて一を
新動開始　千七百三十六年
北分陽を不忘
一を
アムステルダム開始　千七百三十三年
北分帝を不忘
タイトル、ページの面白異也　文字を多く
異同多し
又
ミンタヌス

國書刊行會

東印度会社使節日本渡来記　一冊

こんすたんてぃのぷる二敗ちて渡海不能なりしを
千六百七十年龍動開闢以来大
本也帝大不能事アムステルダムが
ムーア開闢以来千六百六十九年之属
す海を隔てること僅に天地狭し
の辛田川榛斎の手帳四五出版の西洞書記
の一行あり特に面白く覚えしまゝ文云
醫師之思者十死七八
榛斎口口

國書刊行會

の高野長英獄を脱して隠匿中三六タクチ
ツクを著わす、こんぜんがのんえんなることを
論ずるのみならず動機をこんるを四海こんぜんの
このを深し得ざるの長英のおのれを遠
捕こんとも厳重なる命令を以て文を初を
捕ず
○蘭化先生の名のあるを大概文政頃
の先生の薄うして人を
とおらんとの化物と
化遷の名とすと云
蘭学の門に薬
之んをそ

國書刊行會

○大槻文□ 坪井代君の芸者を語る代君の
家に到るや必ず妻君を招きて重宝の侍者に紹
介せらる代君也。一寸も殊に咏じ給ひ出して
でウント計りに卒倒したる人あり君に尊家
人驚きて介抱して漸く蘇りたる代君語りて
曰く吾れ今包囲を受けて無数の枚挙に出るべき
ものは芸者を招きしことも無きものの如き物
出る能はず為めに一義を以て代君を発する
三日、今号を以て一時に鐵を運びし此の人
体なりと申出で合ひたりと

○[redacted]東郷大将の新指揮たりし新活動情勢に存する余が観察
諸来に伊藤侯爵を中心として
ものおそれてもなく翻訳してゐるもの在る
其子なりし名は諸文の適当に続いてゐるなる。文
語の伊藤侯爵俳句の弟子かも知れず
代はりに漢文字のゼミエイットの嬉しき事に
とこふあを候とおりす外に二枚ありし来て無し
く見ぬ、日本人の知らざることの也之れを寄附す
して今回の出版に際し謝状にかへさん為
○未東海氏語る 田沢を平賀源内と称する

し除去のことを奏すること既りとすと雖も後世こ
くの如くと雖も山平の論ずるあるべし、田沉を
拓殖の文的を輸するに於ても同家の大功たり
る疑無きも（監獄の利益を考へ如何なるも（あの
拓殖者に伊豆守たりしこと）其他開
拓用一の既得業を施して後世其家代
々のものこうるべし其他作業の者
若拓殖室現室志を以て以て拓
殖の文的の務々を論ずるに、必人の惑れもさ
ることなきこと、言を田沉の功罪を論ず

九州地方罪を傷のあるとその多しと
雖も論ずる
○流刑の論
流刑不義、つぼ三枚の西新と刻ま
る丸形の分伊豆の海岸味噌や金の
りもしに一家嘉文らしき文の西記すこと
ふくえのは罪馬字を以て義字らしく
又七しくらのあることを分見ず、所物の拓
本を紙にするべし
○新村氏まるくこうちえる之福岡罪
馬字を以て拓すこと印書あり所二字

物語を世に神孫本にて天保年間刊行
也

伊勢参宮物語　文政二年版
タイトルページと巻首一頁
のみ
平家物語　文政三年版
同上
此も巻頭に四方代羅馬字にて
日本のことばと歴史を習はんと
欲する人のために世話を和ら

平家物語也

とひく
又巻末に行を改めて上げたる
とものの物語を羅馬字にて記す
恒藤氏等の著の書名
てくてくてくてくてん　高野孝之
大阪の商人物語味あるものも
和人氏の話しも　文村もと英国の游ひし
る際ブリッジ、ミニヒアムに千六百
三年刊行の

國書刊行會

蘭和辭書

の発しきたるを見、其の言葉ともなりて
唱へらるゝ地方名を外語者
の為に新造の器械のごとくん
の事大なる出版本を法蘭西ハーレンテ
ーン亜細亜協会紀要五冊なる千七百二十四
ー六年の刊行なる偽て海を隔て来
錦帆に基隆の都を捨て果して濱田義
兵衛戰敗の図を載せ、こんこを世なる
流布せる地図の原本なん、文章ともに

七を一枚宮城を西ともし
の江戸ハルマ三十部を限り版を彫ることを今
を減じて北海も一本も出て来て大概如電
の蹴げた書籍を繙訳とする所の
医の福田修庵と云人一本を発するよ
し、北本と蘭字の文を活版にして和字を
書きこゝろみるとなる全体石井恒右エ
門ハルマの大体を彫りて中の印の
うゝきゝのゝうゝ、般若波羅蜜の
五字を以て字母の格番其他を菓

学者間を経て四方に其の説を説きあるを
繁多採決しがたきこの地の江戸ハルマ云々と云
ふ、ハルマの原本を蘭仏蘭法字書なりしを
ハルマの訳也、ハルマの原書既に一見をなさざる
を遺憾也

○英吉利国より公文書来る こんな新き一
奇法なりとも如何程、文書を国語に訳し
其他の法を以て書き同じものを法を異に
して三通来るいずれを例とす公儀に於ては
清文を清語にして清語なる者を
を異にして文字にしたるをこゝで困却したるを
清語なる也 林復斎や古賀茶渓の連中鴻
首仁幸来の四家の外
誘文ならず、偶々茶渓行き清語
例の如く、なるこゝで あんなるこうと
ひとつ発明を初めて清語なるも二コラ
イ第一世のようなるとなき、初めて清語の例も
面目を渙さるまで清語をなすもとこれを
清語の家学なるの自慢なるなり
○大概なる出所なる国学の人 御厄利丑 [illegible]

國書刊行會
國書刊行會

大成とする所本十五冊なる本末西栄著享保
を以て稿する所なり文政十一年の事なるべし
パタビヤ版の英和辞書の稿本彫刻
なる前也北書なる版なるもの未刊
なる過あるべし然三角英和辞書
なる最も広きものなるべし本書は
長文の序あり本書の由来を論じ辞書の
歴史を叙するの一技料也
○大概訳するにパッツリを和訳するに
字訳者多いに困しむなる所なる

なる所なる版を出す後を聞く然るに徳の重者
到り共和政体なる二人共和十四年の頃なる也
迄北海道を用ゆと
○去の事なる定説の所なる者の先生なる人
第一なるもの愛知県の学者也最上内氏
北人の門下の士也版出身なるとの所
の人うまれなる北人の若き西域物語
とする所なる西洋の事を総括する論なる物語
なる所なる早見なる定説人の

新宮の遺物の内の如く可なり多く出土し
且つ之れを門人に多くの品を与へ
う年代の人物人を変ぜんとせず印刷せの事
殆ど埋没しいまだ見へざるも（以上五月十一日
記此日屋敷を閉ず）
○十四日より金の陸列品中印刷部
の内他の巻物に変ずるこの一二
を模写す印刷方法収支一ヶ月二ヶ月
四美丑吹書の印刷部も既に公の命令
きてこれを作くること出版是牧場用接

（其書は高野山）弗三作の墨絵
測自刻印を以て測の字形と合へたる一
帖とする所の内のこの也（不義者
実説の方印を施術傳授者の書屋に
接し（あるこの此の施術者は其の奥書
あるを装訂紙背に貼付する為
七八枚ありて其の墨絵の表紙
へるこの上ハ巻二冊
を施し其中一の図点解るべきこの
あるこの稲荷一書の巻末にあるこの
所なり

國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

吉田家(道)又天正版唐人の図(特殊書式
不足)と浴室岩山自然の記の図の図
を模写す、天正版を模写したるものなん
ども西教略説の古体也恐らく世の模刻
うんと思へうんうん孫也特殊と同じあ
を別又一段不義、八又男うんと
と身分不義のうの孫をもつのとも言き後
をもつの図を模写す男人んなりとこ
ろ、北の西の字しも漢石拓本の図
収録、華山の西の図を左に収録す

三十、宮 熱み強し 醫 菊大
詩を始む
唐澤前侍醫 名孝吸 武乃二宮
乃人、姉氏紹子の加羅姓の子
醫を以て醫を以て 頗る高
此れ下、子を以て 唯の
宮家と 藤岡前侍
四日 伊藤 [illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
日吉宮 常[illegible]
如[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

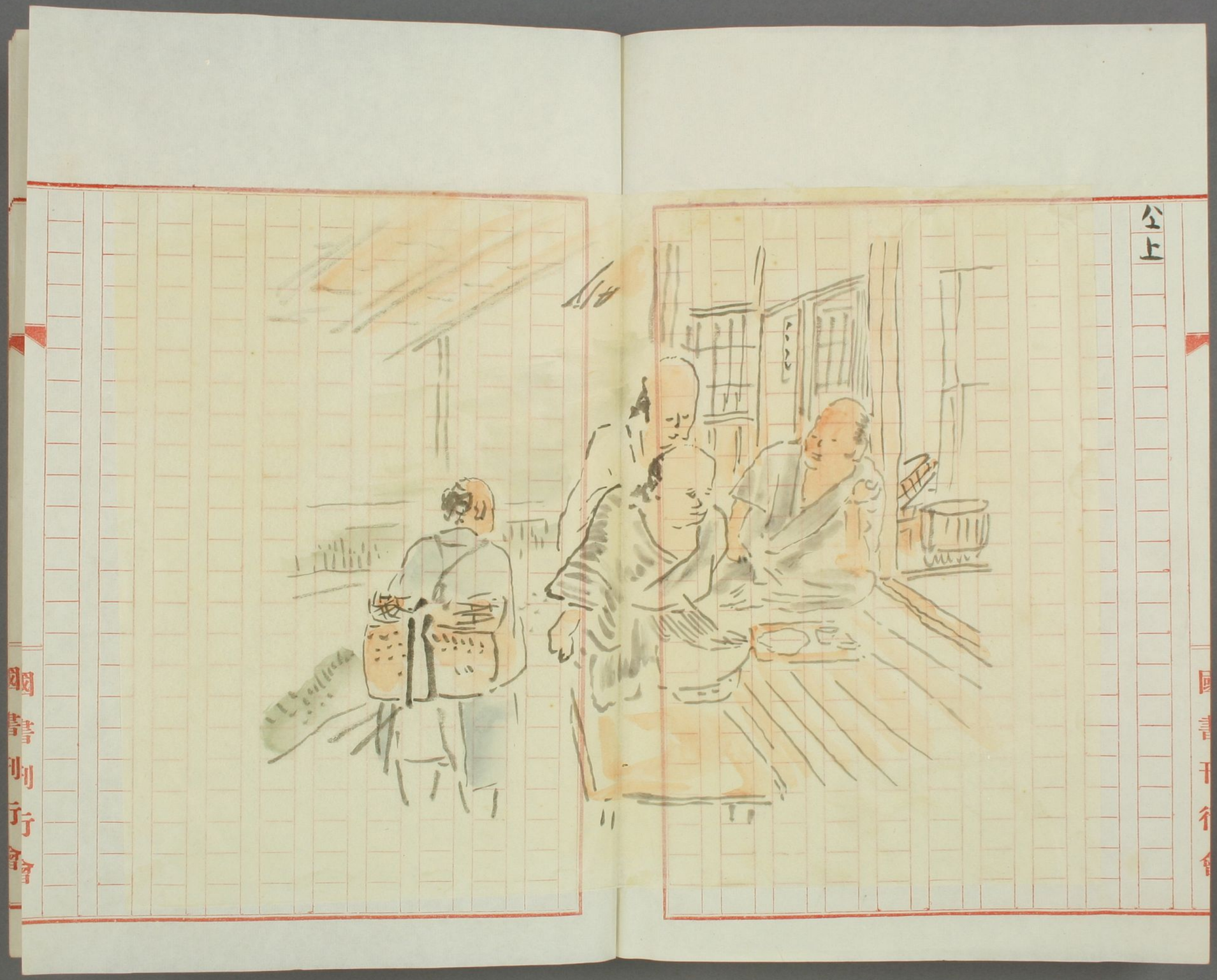
國書刊行會

全上

雪屋醉舞図

國書刊行會

全上
國書刊行會


公上
國書刊行會
國書刊行會

俠客袁八像

九月廿四日余カ寨木ニ来シヲ聞キ尋ネ来ル
里人皆敬服ス首ヲ地ニ貼ス
袁八ノ言ハ皆唯ニ諾ト云ル

里中有事
決ヲ袁八ニ取ル亦又里長中野新乎衛余カ堂ヲ去ル盛儀ヲ皆云初テ袁八ニ拝シ置ヲ受サルモノハ只子アルノミ

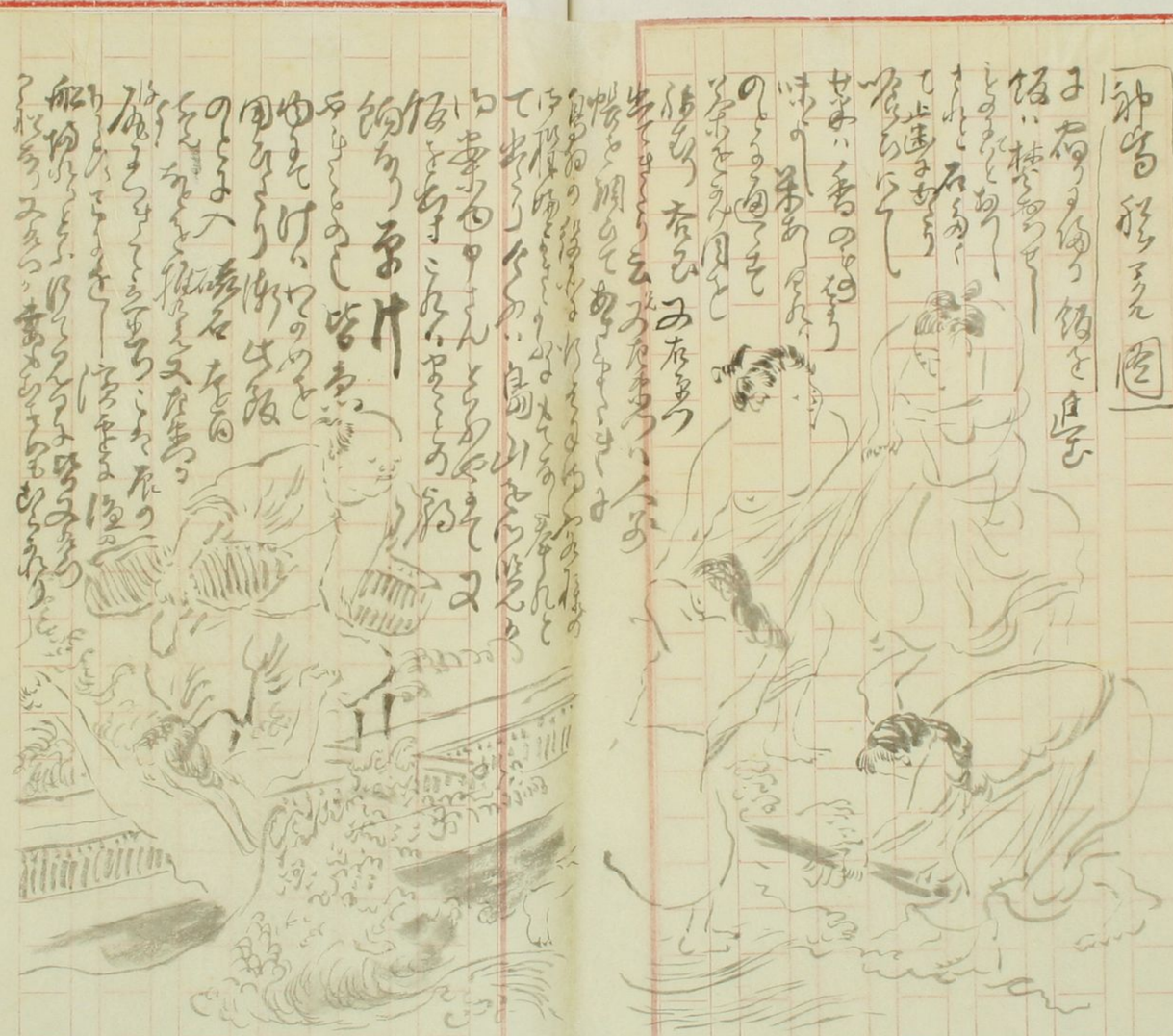
國書刊行會

今上陛下　大海の記の巻

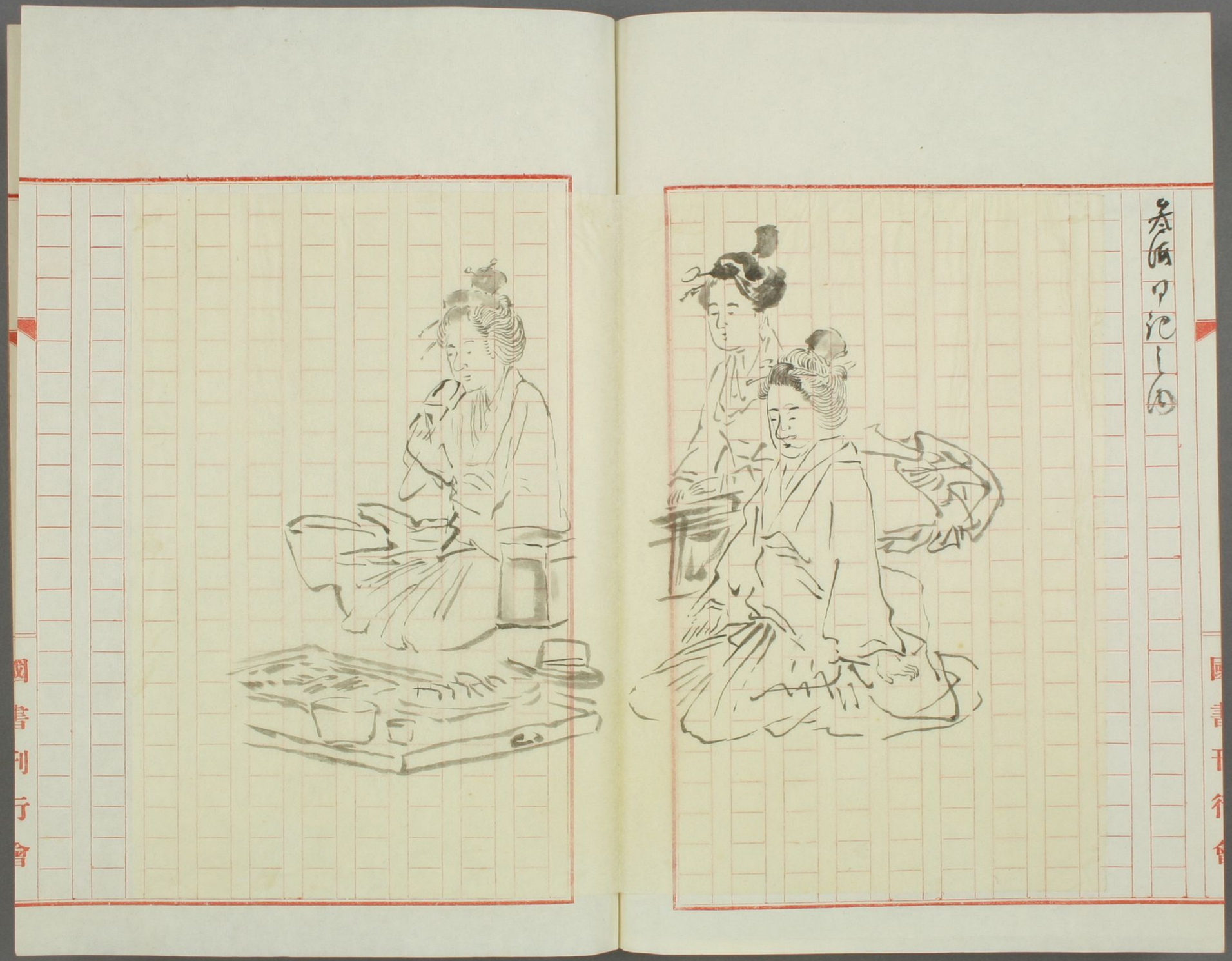
孤島風景

海岸のこゝろ淋しい衣類は
とゝ他国のものとそれハまきこうゝ
きもてゝいるよ特色ハ
まつ多く炭明山まつ
高山ハ島中千一の高山
ゆゑて中腹皆松多くこの
松の根ハ皆横ニ口りて地を
ハうもて七長サ九十間より
十四五間ニも及ぶもしこれハ
地中皆岩石ゆゑれハ
なり

國書刊行會



國書刊行會


國書刊行會
國書刊行會

國書刊行會

國書刊行會

閲覧室

國書刊行會